

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第44集

はる つじ
原の辻遺跡

令和2年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2022

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第44集

はる つじ
原の辻遺跡

令和2年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



2022

長崎県教育委員会



カラー写真 1 令和 2 年度調査区遠景（西から）



カラー写真 2 令和 2 年度調査区遠景（北西から）



カラー写真3 令和2年度調査区遠景（南東から）



カラー写真4 1区自然流路（南東から）



カラー写真5 2区古代道路検出状況（南東から）



カラー写真6 令和2年度2区鉛直写真（右が西）



カラー写真 7 2区東側竪穴建物群（西北西から）



カラー写真 8 3区掘削終了状況（南西から）

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、令和2年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されているのは原の辻遺跡だけであり、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の国特別史跡としての指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や出土場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1,670点が、平成25年6月、重要文化財に指定されました。

令和2年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町深江鶴亀触の閑繆地区で実施いたしました。閑繆地区は、原の辻丘陵の北側に広がる小谷の谷頭部分周辺を指しますが、過去の調査により東側の山裾に沿う場所に弥生時代の墓域が広がることが確認されています。今回は、小谷の西側および中央部において調査を実施いたしました。小谷の西端では小河川（幡鉢川の支流）を、中央部においては沼地状の堆積を確認し、これら小河川と沼地の間では弥生時代の集落と、奈良時代ごろの道路跡が確認されました。

発掘調査の実施にあたり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査結果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

令和4年3月18日

長崎県教育委員会

教育長 平田 修三

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、令和2年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触である。
4. 令和2年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会 委員長 西谷 正（九州大学名誉教授、宗像市海の道むなかた館長）
委 員 石田 智子（鹿児島大学法文学部准教授）
委 員 大坪 志子（熊本大学埋蔵文化財調査センター准教授）
委 員 工楽 善通（大阪府立狭山池博物館名誉館長）
委 員 佐古 和枝（関西外国语大学教授）
委 員 徐 光輝（龍谷大学国際学部教授）
委 員 武末 純一（福岡大学研究特任教授・名誉教授、春日市奴国之丘歴史資料館名誉館長）
委 員 村上 恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長）

〔委員記載は50音順〕

長崎県埋蔵文化財センター

所 長 兼 東アジア考古学研究室 室長 寺田 正剛
東アジア考古学研究室 主任文化財保護主事 白石 溪洋（調査・整理担当）
主任文化財保護主事 山梨 千晶
(調査担当、現長崎県教育庁学芸文化課)
文化財保護主事 中野 真澄（整理担当）
文化財調査員 林田 卓也（整理担当）
文化財調査員 嶋田 博子（事務担当（現退職））
調査課 文化財保護主事 岩佐 朋樹（調査補助）

調査協力 壱岐市教育委員会社会教育課

なお、調査を実施するに際し、調査区の承諾等で以下の方の御協力をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

〔閑縁地区〕 土地所有者 山村 晃氏、山村 縮

耕作者 農事法人原の辻 理事長 山川 輝光

5. 本書で使用した遺構実測は白石と山梨が、写真撮影は白石が行った。

また、遺物の実測、トレースについては山口美代子、出口美由紀、下条紗地、草野みゆき、東川薰平、寺田、白石、中野、林田が、遺物写真撮影は白石が行った。

6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で用いた座標は、旧日本測地系である。
8. 本書で用いた方位は、座標北である。
9. 報告書に用いた基本層序及び出土遺物観察表の色調については、『新版標準土色帖』(富士平工業株式会社)を用いた。
10. 本書に用いた引用・参考文献は、Ⅲ章の末尾にまとめて記載している。
11. 本発掘調査の長崎県遺跡調査番号はHAR202013である。
12. 本書の執筆・編集は、白石・中野・林田が行った。

本文目次

I	遺跡の立地する環境	1	IV	総括	48
1.	地理的環境	1	1.	1区	48
2.	歴史的環境	2	2.	2区	48
II	調査に至る経緯と進行	5	3.	3区	50
1.	調査の経緯	5	付	論	51
2.	調査の進行	7	1.	1区の自然科学分析	51
III	調査	8	堆積物中の珪藻化石群集 (株式会社パレオ・ラボ)		
1.	調査概要	8	2.	3区の自然科学分析	54
2.	各地区の様相	9	原の辻遺跡発掘調査検出試料自然科学分析		
(1)	1区の調査	9	報告 (株式会社古環境研究所)		
(2)	2区の調査	21			
(3)	3区の調査	34			

挿図目次

第1図	壱岐島地質図	1	第12図	流路5-1層出土遺物 (1/3)	13
第2図	周辺遺跡位置図	4	第13図	流路5層出土遺物 (1) (1/3)	14
第3図	令和2年度調査研究事業調査区位置図	5	第14図	流路5層出土遺物 (2) (1/3)	15
第4図	調査区位置図 (座標) (1/1000)	8	第15図	流路2-1・2-2層、流路4層出土遺物 (1/2)	16
第5図	調査区位置図 (1/2000)	9	第16図	流路5-1層出土遺物 (1/2)	17
第6図	1区西側遺構平面図 (1/60)	10	第17図	流路5層 (5-2・5-3層) 出土遺物 (1/2)	19
第7図	1区西側北壁土層図 (1/60)	10	第18図	SD06・SD07・SD08、SD04・SD05、遺物包含層、旧耕作土出土遺物 (1/2・1/3)	20
第8図	1区東側遺構平面図 (1/60)	11	第19図	2区西側遺構平面図 (1/60)	22
第9図	1区東側北壁土層図 (1/60)	11	第20図	2区北壁西側土層図 (1/60)	22
第10図	1区遺構配置図 (1/120)	11			
第11図	流路1層、流路2層、流路4層、流路5-1層出土遺物 (1/3)	12			

第21図	2区東側遺構平面図 (1/60)	23	第35図	2区 SI02・SI03・SK01 出土遺物 (1/2・1/3)	30
第22図	2区北壁東側土層図 (1/60)	23	第36図	2区 SD02・SX01 出土遺物 (1/3)	32
第23図	2区遺構配置図 (1/120)	23	第37図	2区 SP01・SP08、溝（現代）出土遺物 (1/2・1/3)	33
第24図	2区西側遺構平面図（縮尺任意）..	24	第38図	2区 遺物包含層出土遺物 (1/2・1/3)	34
第25図	2区サブトレント1,3北壁土層	24	第39図	3区西側調査区平面図 (1/60)	36
第26図	2区北壁土層図 (1/30)	24	第40図	3a区北壁土層図 (1/60)	36
第27図	2区サブトレント3北壁土層図 (1/30)	24	第41図	3区東側調査区平面図 (1/60)	37
第28図	SI01 北壁土層図 (1/30)	26	第42図	3b区北壁土層図 (1/60)	37
第29図	SI01・SI03 平面図 (1/30)	26	第43図	3区内調査区位置図 (1/120)	37
第30図	2区東壁サブトレント土層図 (1/30)	27	第44図	3区2~4層出土遺物 (1/2・1/3)	39
第31図	SI02・SK01 平面図 (1/30)	28	第45図	3区5・6層出土遺物 (1/3)	40
第32図	SI02 サブトレント土層図 (1/30)	29	第46図	3区5層出土遺物 (1/2)	41
第33図	SI02 床面直上土器出土状況 (1/10)	29	第47図	3区その他の出土遺物 (1/3)	42
第34図	SK01 土層断面図 (1/30)	29			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	4	第3-2表	土器・陶磁器観察表 (2区)	45
第2表	令和2年度調査測量座標一覧	7	第3-3表	土器・陶磁器観察表 (3区)	46
第3-1表	土器・陶磁器観察表 (1区)	44	第4表	石器観察表	47

写真目次

カラー写真1	令和2年度調査区遠景（西から）	写真9	2区東側赤生時代堅穴建物群（東から）
カラー写真2	令和2年度調査区遠景（北西から）	写真10	SI01 完掘状況（南から）
カラー写真3	令和2年度調査区遠景（南東から）	写真11	SI02 炉跡半裁状況（東から）
カラー写真4	1区自然流路（南東から）	写真12	SI02 床面直上土器出土状況（西から）
カラー写真5	2区古代道路検出状況（南東から）	写真13	SI03 挖削終了状況（西から）
カラー写真6	令和2年度2区鉛直写真（右が西）	写真14	SK01 半裁状況（南東から）
カラー写真7	2区東側堅穴建物群（西北西から）	写真15	サブトレント4土層堆積状況（北東から）
カラー写真8	3区掘削終了状況（南西から）	写真16	3b区土層堆積状況（南西から）
写真1	1a区自然流路完掘状況（東から）	写真17	自然流路5-1層出土土器（第12図14）
写真2	1a区自然流路土層堆積状況（南から）	写真18	自然流路5-1層出土土器（第12図15）
写真3	1a区自然流路5-1層遺物出土状況（南から）	写真19	SI02 床面直上出土土器
写真4	1区調査終了状況（東から）	写真20	SK01 出土土器
写真5	1b区古代・中世遺構検出状況（北西から）	写真21	1区出土石器
写真6	1b区SD08, 07, 06 調査終了状況（南から）	写真22	SI02 出土遺物
写真7	2区西側北壁土層堆積状況（南西から）	写真23	3区出土石器
写真8	古代道路調査終了状況（東から）		

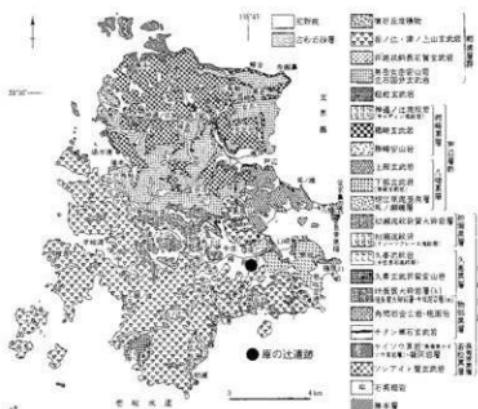
I 遺跡の立地する環境

1. 地理的環境

原の辻遺跡が所在する壱岐島は、九州と朝鮮半島との間に位置する東西約15km、南北約17km、面積約139 km²の島である。壱岐から佐賀県唐津市までは南東に約30km、対馬市厳原までは北東に約70kmであり、ともに壱岐からの目視が可能である。韓国釜山までは北北東に約160kmである。島の地質は下位より4つの層群に分類され、下位には砂屑物（さいせつぶつ）の堆積が、上位には火山噴出物の堆積が見られる。大部分の溶岩台地では浸食が進んでおり、壱岐島は全体的に平坦で起伏が乏しい。この溶岩台地上にはスコリア丘（多孔質で黒い溶岩が、円錐台形の山をなした小規模な火山）が点在するが、島の最高点は島南部の岳の辻で、標高213mと低平である。気候は、玄界灘を北流する対馬海流が島の周囲を洗うため温暖で、年平均気温は15℃台、年間降水量は約1,900mmである。

原の辻遺跡は、「深江田原（ふかえたばる）」と呼ばれる平野の東寄りに位置する。深江田原は、島内で最も流路が長い幡鉢川（はたほこがわ）の作用によって形成された、県内二番目の面積をもつ沖積低地であるが、この深江田原に向かって、南から北に伸びる小丘陵およびその周辺の沖積低地に原の辻遺跡は所在する。現在の低地部の標高は6m、丘陵部の標高は18m程度である。遺跡の東側には内海湾（うちめわん）と呼ばれる湾入約3.5km、水深10m以内の浅い湾が入り込んでおり、幡鉢川はこの湾に流れ込む。原の辻丘陵から内海までの距離は約1.5kmであり、比高差は約5~6mで流れは緩やかである。また、幡鉢川の河口周辺は切り立った崖が両河岸に迫っている。

遺跡の中心部の丘陵は、玄武岩台地の上に形成され、先端は後世の削平などにより岩盤が露出している。昭和30年ごろまでは畠土を高く盛り上げた饅頭畑（まんじゅうばたけ）の風景が見られた地



第1図 壱岐島地質図

域であったが、ブルドーザーによる整地と、ボーリングによる地下水の利用のため、平地化や水田化が進行し、今はその名残をほとんど見ることができない。遺跡の周辺部にあたる沖積低地は、平成4~14年度にかけて幡鉢川流域総合整備事業により広大な圃場が造成されているが、この整備にあたっては、原の辻遺跡の保存のため、保護層の敷設がなされている。

2. 歴史的環境

壱岐の歴史は、古くは今からおおよそ 30,000 年前（鶴田遺跡；ナイフ形石器文化中期：姶良丹沢火山灰（AT）降下（約 29,000 前）の直前）に遡る。最終氷期極大期（Last Glacial Maximum :LGM：26500 年前頃）には海面が現在より 100 ~ 120m 程度下がったとされ、壱岐は九州本土と陸続きで、多数の河川が流れる広大な平原に囲まれていたと考えられている。壱岐では、この時代の遺物は原の辻遺跡を含め、壱岐国分寺跡、松崎遺跡、興原遺跡、鶴田遺跡、興触遺跡、大宝遺跡、椿遺跡、坂遺跡、名切遺跡、木ノ本遺跡の計 11 遺跡において確認されているが、多くは表面採集品が得られたのみで、遺跡の内容が明らかな遺跡は少ない（川道 2014）。こうした中で原の辻遺跡においては、層位的に石器群の変遷を捉えられる事例はいまだ確認されていないものの、多くの地点での発掘調査において、旧石器時代の遺物が確認されている。これまでに、姶良丹沢火山灰（AT）降下直後に朝鮮半島から分布が拡大したと考えられる剥片尖頭器や、その名を冠する「原の辻型台形石器」が確認されてきたが、原の辻遺跡での近年の調査においては、狸谷型ナイフ形石器と原の辻型台形石器をそれぞれ中心とする二つの石器群が想定された。結果的には「分けられない」という結論に至ったものの、その技術構造に対する検討および自然科学分析（蛍光 X 線分析）の産地推定により、両者の関係を明らかにしようとする試みがなされている（川道 2014、川道・片多・辻田 2017）。最終氷期極大期（LGM）の後、海面が次第に上昇し、今からおおよそ 9,000 年前の縄文時代早期押型文土器段階に壱岐と九州本土が切り離されたものと想定されている。

縄文時代には、壱岐島全体で 20 カ所ほどの遺跡が知られているが、内陸の遺跡のほとんどは草創期の細石刃関係遺跡で、早期以降の遺跡は海岸部に位置する。松崎遺跡、大柳遺跡、内野遺跡、釜崎海岸遺跡・名切遺跡、馬立海岸遺跡などは、西海岸の岩石海岸の潮間帯に多く位置するが、湯ノ本湾の潮間帯に位置する松崎遺跡では、朝鮮半島南岸地域の柳目文土器が採集され、また旧郷ノ浦町の名切遺跡では、潮間帯から貯蔵穴（ドングリピット）が 30 基以上検出されており注目される。海岸部に位置するこの両遺跡は、縄文時代早・前期から後期中葉または晩期にまで長期間にわたって利用されたと考えられている。これとは異なり内陸部に位置する原の辻遺跡では、縄文時代後期初頭・前葉を中心とした時期に一つの盛期があるとみられるが、大規模な集落が営まれた可能性は低く、壱岐の内陸部における、生産活動を中心とした限定的な土地利用の在り方を示すものとされている（古澤・田中 2014）。

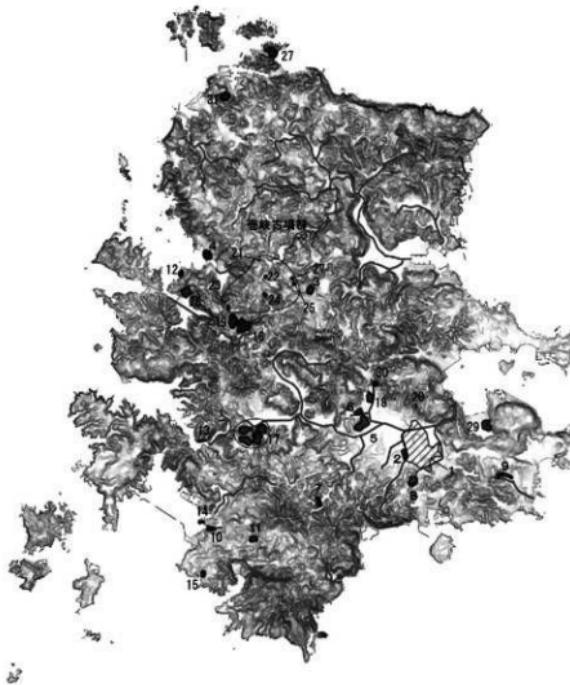
弥生時代には、現在約 60 カ所の弥生時代の遺跡が知られるが、このうち 3 つの拠点集落、すなわち壱岐の南東部、県内二番目の面積をもつ沖積低地である深江田原に位置する原の辻遺跡、壱岐の北西部の丘陵上に位置するカラカミ遺跡、両遺跡のほぼ中間に位置する車出遺跡が、この時代を考える上で特に重要である。このうち原の辻遺跡は、面積 100ha と推定される遺跡の規模や、船着き場跡といった特殊遺構、韓半島系・楽浪系の遺物を多量に検出することから、三世紀の末に西晋の陳寿によつて記された『魏志倭人伝』に記載される一支国の王都と目されている。近年では、中国遼寧省よりもたらされたと考えられる東系銅鏡（古澤・片多 2017）や、韓半島南部の金海地域よりもたらされたと考えられる馬形青銅製品などが見つかり（壱岐市教育委員会 2021、白石 2021）、海をまたいだ交流の実態を表すものとして注目される。壱岐西北部の丘陵頂部に環濠集落を造成したカラカミ遺跡は、近年の調査成果よって、漁業活動を生業としながら、鉄器や鉄素材などを輸出する中継交易の拠点で

あったとされ（宮本編 2013）、一支国の王都と目される原の辻遺跡とどのような関係にあったのかが問題となっている。また、現状では両者の中間に位置する車出遺跡の様相は十分に解明されていないが、これら3つの拠点集落における歴史的な展開、またそれぞれの役割については、これからの解明が待たれる。

古墳時代になると、壱岐において前期の遺構・遺物が見つかるのは、原の辻遺跡や深江田原の最奥部に位置する観城跡、またカラカミ遺跡に隣接した国領遺跡などに限られ、これは弥生時代に盛んであった对外交渉・交易システムが崩壊したことによると考えられている。5世紀後半になり、原の辻遺跡を見下ろす丘陵上に大塚山古墳が築造されるのを皮切りに古墳の築造が始まる。特に6世紀後半から7世紀前葉にかけて多くの古墳が築造されるが、島の中央部には大形古墳が集中する国史跡「壱岐古墳群」が形成される。これらの古墳は、①玄室に至るまでに長大な前室（・中室）を設け、②それら玄室を除く部分の天井高を同一レベルに揃える、という特異な形態を特徴とするが、最新の研究成果によると、これは古墳時代終末期の畿内系横穴式石室の特徴であるという。このことから、これらの古墳出現の背景を、筑紫の君磐井の乱（527年）の後、壱岐直氏と物部氏との軍事的関係が緊密になることに求め、在來の北部九州系横穴式石室の要素と合わせて「壱岐島型横穴式石室」が出現したと考えられている（小田 2021）。

壱岐の古代の論点として、『延喜式』等に壱岐国石田郡に置かれたとされる壱岐国府の所在地がどこであったのかという問題がある。古くは19世紀後半から1990年代まで、壱岐郡国分説、石田郡興原説、そして両者の移転説が論じられてきたが、1990年代後半に原の辻遺跡で行われた数次の発掘調査の成果によって、初期貿易陶磁器やイスラム青釉陶器などの豪奢物がまとまって見つかった原の辻遺跡大川地区が新たな候補地として注目されることになった。壱岐島内ではこのほかに、串山ミルメ浦遺跡や壱岐島分寺跡、興触遺跡、石路遺跡などにおいて、発掘調査により次第に情報が集められているが、これらの成果を踏まえた総合的な見地から、壱岐国府は8世紀後半に原の辻遺跡の大川地区に整備され、9世紀後半には興触遺跡周辺に移転、12世紀初頭に機能を失うという考えが示されている（河合 2021）。

壱岐の鎌倉時代には、元軍からの2度の攻撃（元寇；文永・弘安の役）により壊滅的な被害を受けたとされている。戦死者を埋葬した「千人塚」や、住民が逃げ込んだとされる「かくれ穴」などが残されているものの、考古学的な情報は限られている。壱岐では52カ所の城館跡が確認されている他（長崎県教育委員会 2010）、観城遺跡、天水遺跡、定光寺前遺跡といった遺跡において発掘調査が行われ、次第に当時の様相が解明されてきている。このうち特に、壱岐を分割統治した松浦党の五氏のうち、志佐氏の代官真弓氏の城であるとされる観城遺跡の発掘調査において、中国産の陶磁器に加え、朝鮮産、ベトナム産、タイ産の陶磁器が一定量検出された。これは1350年頃から始まる前期倭寇としての活動や、その後の活発な交易活動の一端を表すとされる。1472年に波多泰の侵攻によって観城は陥落し、波多氏の統治が始まるが、その後波多氏を破った日高氏が平戸松浦氏の家臣となった。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際には、兵站基地として勝本城が築かれるなど、壱岐は常に对外交渉の前線に位置していたのである。



第2図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	原の辻遺跡	丘陵・平野	旧石器時代、弥生時代		16	カラカラ遺跡	集落・貝塚	丘陵	旧石器時代、弥生時代
2	鶴田遺跡	墓地	丘陵	弥生時代	17	車出遺跡	遺物包含地、経塚	丘陵・台地・山地	弥生時代、古代～中世
3	帶岐園分寺跡 (端分寺跡)	社寺跡	台地	古代	18	城城跡	遺物包含地	丘陵	弥生～古墳時代、中世
4	松崎遺跡	遺物包含地	海底	縄文時代	19	国柳遺跡	遺物包含地・墳墓	丘陵	旧石器～古墳時代
5	興原遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代、弥生～古墳時代	20	大埋山古墳	古墳	丘陵	古墳時代
6	興原遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器～古墳時代	21	掛木古墳	古墳	丘陵	古墳時代
7	大室遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代、古代～中世	22	菅原古墳	古墳	丘陵	古墳時代
8	椿遺跡	遺物包含地	台地	縄文時代、古墳時代	23	対馬塚古墳	古墳	丘陵	古墳時代
9	坂遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代、弥生～古墳時代	24	双六古墳	古墳	丘陵	古墳時代
10	名切遺跡	遺物包含地	海岸部	縄文時代	25	鬼の庭古墳	古墳	丘陵	古墳時代
11	木ノ木遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器～縄文時代	26	兵庫古墳	古墳	丘陵	古墳時代
12	大柳遺跡	遺物包含地	その他(海浜)	縄文時代	27	串山ミルメ浦遺跡	遺物包含地	砂浜	縄文時代～古代
13	内野遺跡	遺物包含地	海底	縄文～古墳時代	28	石路遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生～古墳時代
14	錦崎海岸道路	遺物包含地	海岸部	縄文時代	29	天水遺跡	遺物包含地	貝塚	弥生時代
15	馬立海岸遺跡	遺物包含地	海岸部	縄文時代	30	定光寺前遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代～中世
					31	勝本城跡	城跡	丘陵	中世

II 調査に至る経緯と進行

1. 調査の経緯

原の辻遺跡の調査の歴史は、『原の辻遺跡総集編Ⅰ』に詳しく（長崎県教育委員会 2005）、また各報告書において詳細に論じられている（長崎県教育委員会 2021 など）。これによると、これまでの発掘調査・研究史は、「大正時代初期の地元研究者による遺跡紹介から 1944 年までの戦前の調査研究段階（第 1 段階）、戦後の 1951 年から 1961 年に至る東亜考古学会による学術調査段階（第 2 段階）、1974 年から現在（2005 年当時；執筆者追記）までの長崎県・芦辺町・石田町教育委員会による行政調査段階（第 3 段階）というように、大きく 3 つの段階に区分」（長崎県教育委員会 2005 p.20 1.5-8）されてきた。ここで記載されているように、1974 年以降（第 3 段階以降）は、行政によって調査がなされ、これは現在においても、多くは老岐市教育委員会により、原の辻遺跡内での緊急発掘調査として実施され、弥生時代終末期の甕棺や、日本初の事例となる馬形青銅製品を確認するなど（老岐市教育委員会 2021）、大きな成果を上げている。こうした一方、平成 14 年度からは、環濠などの重要遺構を確認し特別史跡追加指定の基礎資料を得るという目的を持つ事業として、原の辻遺跡調査研究事業が継続的に実施されてきており、開発を契機とする緊急発掘調査とは性質を異にしている。平成 14 年度から令和 2 年現在に至る調査段階は、このような調査が主流であることから、原の辻遺跡調査の第 4 段階に入っていると評価できよう。

この事業におけるこれまでの主な成果としては、平成 8 年度に圃場整備に伴う発掘調査で遺跡西側低地部に確認された船着き場跡に関して、周辺地形や、築造から廃棄に至る時期についての情報を得られたことが挙げられる。また現在は、文化庁との協議の上、平成 24 年度から 10 年間の計画で調査が行われており、遺跡の北東側から南側にかけての地域を対象に調査が実施してきた。この 10 年計画においては、令和元年度までに原の辻遺跡丘陵部北側の 6 地点、および原の辻遺跡丘陵部南側の 3 地点が調査されており、結果的に原の辻遺跡丘陵部北側において、集中的に調査が実施された。これにより、特に旧河川（幡鉾川とその支流）に関する情報や、弥生時代の遺構の広がりなどについて、多くの情報を得ることができた。また、南側の地点においては、旧石器時代や古代の遺物が確認され、弥生時代前後の歴史的展開についても情報が蓄積されてい



第 3 図 令和 2 年度調査研究事業調査区位置図

る。

こうした状況を踏まえて 10 年計画の 9 年目となる令和 2 年度は、令和元年度に引き続き、閾縁地区において発掘調査を再度実施した。これは令和元年度の調査によって、閾縁地区の墓域の広がりおよび自然地形の確認を目指したもの、圃場整備時の造成土が厚く堆積したため、目的が果たされなかつたためでもある。

閾縁地区は、原の辻丘陵の北側、安国寺が所在する高台の南側の緩傾斜地に位置する。二つの高台に挟まれた谷頭から南東にやや下った丘陵沿いでは、東亜考古学会と原の辻遺跡調査事務所により、弥生時代中期を中心とした甕棺墓と石棺墓の列状配置が 2 地点（「閾縁 1954 年調査」及び「閾縁 1995 年調査」（宮本編 2018））で確認されている。

「閾縁 1954 年調査」地点は、昭和 29（1954）年 3 月土木工事の際に発見され、同年 3 月から 4 月にかけて東亜考古学会により発掘調査が実施された。5 基の箱式石棺墓と 16 基の甕棺墓が検出されている。箱式石棺墓の時期は不明で、出土した碧玉製管玉は現在では所在が不明である。甕棺墓は弥生時代前期末から中期前半に比定される。甕棺については、壱岐市が九州大学から譲与され保管している。

「閾縁 1995 年調査」は、平成 7（1995）年度及び平成 10（1998）年度に、長崎県教育委員会が幡鉢川流域総合整備計画に伴い発掘調査を実施し、箱式石棺墓 9 基、甕棺墓 7 基、土坑墓 11 基が確認されている（長崎県教育委員会 1999）。この調査においては、遺構を確認した段階で現地保存のため埋め戻されており、石棺の構造や石棺内の副葬品の有無などといった情報は得られていない。側溝工事により破壊が避けられない 1 号石蓋土坑墓において記録保存調査が実施されたのみである。

さて、令和 2 年度の閾縁地区的調査地は、谷頭を南西にやや下った場所（甕棺と石棺墓の列状配置の谷をはさんだ反対側）であり、現状は米や麦や大豆を栽培する耕作地である。これまでの調査成果から、この地点において墓域の広がりは想定されないが（長崎県教育委員会 1997 ほか）、III 章（「調査」）で詳述するように、この地区的自然地形や、土地利用の変遷を把握することによって、原の辻遺跡の歴史を復元するために非常に有益な情報を得られることが期待された。このため令和 2 年度は、この地点において範囲確認調査を実施することとした。

2. 調査の進行

令和2年度は、調査準備として令和2年10月29日（木）に閑縁地区の調査区（1区～3区）。各調査区の面積は100m²で、合計300m²を設定し（第2表）、令和2年11月4日（水）から発掘調査を実施した。終了は令和2年12月25日（金）である。

11月4日から11月6日にかけて、バックホウによる表土（有効土層）と客土（心土層；圃場整備時の造成土）の掘削を行った。これらの除去後、バックホウでの掘削深度や検出土層に応じて、調査区ごとに小グリッドの設定やバックホウでの更なる掘削を行うなど異なる対応が必要となったが、詳細については、各調査区の調査の項目で後述する。11月18日（水）および11月25日（水）には、壱岐高校歴史・中国語コース生徒の1・2年生を対象とした発掘体験を実施した。12月2日（水）には原の辻遺跡調査指導委員会が行われ、7名の委員の先生の参加を得た。12月5日（土）には、現地説明会を実施し44名の参加を得た。12月10日（木）および12月11日（金）の二日間にわたりて、長崎県、福岡県、佐賀県の11個の自治体（令和3年現在）から構成される北部九州三姉妹遺跡連絡会議が実施され、8つの自治体から13人の参加を得た。12月14日（月）には、ドローンを用いた航空写真撮影を実施した。12月21日（月）から埋め戻し作業を開始し、12月25日（金）に埋め戻し作業および機材等の撤収作業を完了した。

令和2年

- 10月29日（木）晴れ 調査準備：閑縁地区の調査区設定（1区～3区）
- 11月4日（水）晴れ 重機による表土剥ぎ。作業員雇用開始。環境整備等実施。
- 11月6日（水）晴れのち曇り 重機による表土剥ぎ及び造成土掘削が終了。
- 11月18日（水）晴れ 午後、壱岐高校コース生徒発掘体験（1・2年生徒・引率2名）。
- 11月25日（水）曇りのち晴れ 壱岐高校コース生徒発掘体験（1・2年生・引率3名）。
- 12月2日（水）曇り 原の辻遺跡調査指導委員会。
- 12月5日（土）晴れ 現地説明会。
- 12月11日（金）晴れ時々曇り 九州北部三姉妹遺跡連絡会議の参加者来場。
- 12月14日（月）晴れ時々曇り 空中写真撮影。
- 12月21日（月）晴れ時々曇り 3区より埋め戻し開始。（調査と並行して実施。）
- 12月25日（金）晴れ 埋め戻し完了。機材返却等、完了。

第2表 令和2年度調査測量座標一覧

	X	Y		X	Y		X	Y			
1区	北西杭	84577.656	23269.121	2区	北西杭	84593.392	23296.574	3区	北西杭	84611.148	23333.803
	南西杭	84572.763	23270.158		南西杭	84588.496	23297.562		南西杭	84606.185	23334.828
	南東杭	84576.741	23289.741		南東杭	84592.469	23317.156		南東杭	84610.209	23354.408
	北東杭	84581.622	23288.729		北東杭	84597.381	23316.182		北東杭	84615.103	23353.398

III 調査

1. 調査概要

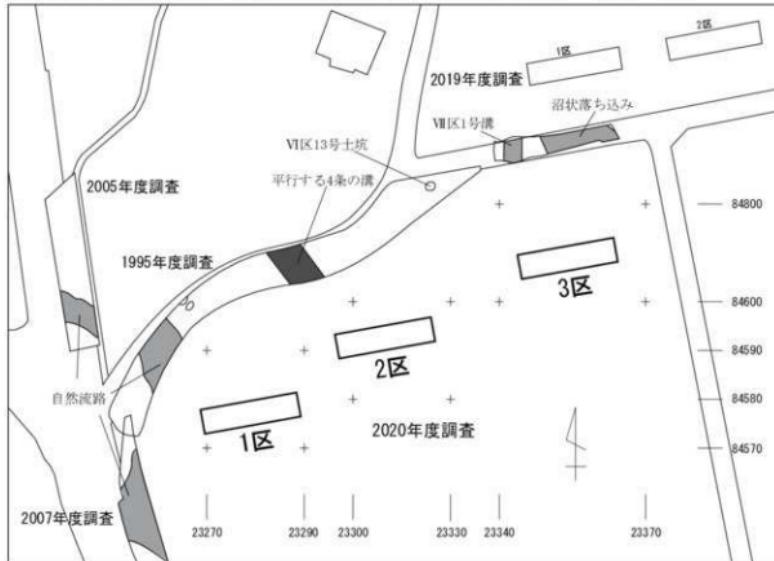
令和2年度の調査地の北側および西側においては、平成7年、平成17年、平成19年に、現在の自動車道に沿って調査が行われている。また令和元年度には、今年度の調査地の北東側を調査し、盛土が厚く堆積する状況が確認されている。これらの成果を受けて、次の3つの問題を解明することを目的として、それぞれに100m²の調査区（1区～3区）を設定し、合計300m²の調査を行った。

①幅鉢川本流に注ぐ支流の形状（幅や流れる方向など）の把握（1区）。

②古代の道路の有無と、実態の解明（2区）。

③古墳時代前期の遺構の広がり（3区）。以上の3つである（第5図）。

調査区は、圃場整備の際に東西方向に10m間隔で埋設されている暗渠排水を避け、5m×20mの調査区を3ヶ所設定し、西側から1区・2区・3区とした。また調査区の表土及び造成土を重機で除去したところ、それぞれの地区的様相は一様ではなく、調査区ごとに異なる対応を必要とした。1区の西側については安全面を考慮してコンバネ幅（1.25m）のテラス状の段を北・西・南の三方に残して掘削した。1区の東側については、全面を調査した。2区については、全面を調査した。また3区においては、表土および客土の除去後に粘土層の厚い堆積が確認されたため、ある程度安定した堆積層に至るまで0.45バックホウによる掘削を行い、結果的に調査区の西に1.50m×6.0m（3a区）、東側には1.50m×7.5m（3b区）を設定して調査を行った（第4図、巻頭カラー写真1～3）。



第4図 調査区位置図（座標）（1/1000）

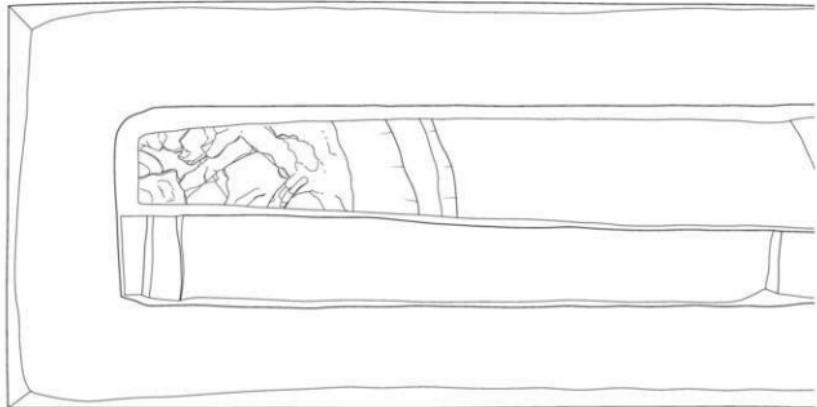
2. 各地区の様相

(1) 1区の調査（第6～18図、巻頭カラー写真4、写真1～6）

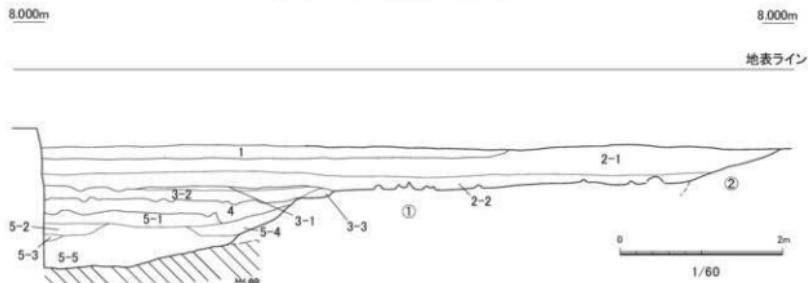
1区は、III章1節（調査概要）で述べたように、「①幡鉢川本流に注ぐ支流の形状（幅や流れる方向など）の把握」を目的として調査を行った。重機掘削の結果、調査区の中央や東寄りから西側に流路の平面プランが確認されたため、 $2.85m \times 8.75m$ を1a区として設定し、更にそのうち北半分の $1.25m \times 8.75m$ について掘削を行った（第6図）。

表土・客土以下には近世の陶磁器片を含む旧耕作土の堆積が見られ（第9図の旧耕作土）、この層





第6図 1区西側造構平面図 (1/60)



第7図 1区西側北壁土層図 (1/60)

1a 区北壁土層図 土層記注

旧耕作土：にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強い。粘性やや強い。φ 2～5mm程度の黄褐色粒子（風化礫）を非常に多く含む。近世以降の陶磁器小片を含む。

1： 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり強い。粘性強い。φ 2～15mm程度の黄褐色粒子を多く含む。
2-1：暗褐色粘質土（10YR4/3）しまり強い。粘性強い。φ 5mm程度の黄褐色粒子をまばらに含む。下層の2層との境界は漸移的で、特に下方には斑鉄が見られる。H19調査の4a層に対応するものと思われる。

2-2：褐灰色粘土（10YR4/1）しまり強い。粘性非常に強い。φ 10mm程度の黄褐色粒子をわずかに含む。斑鉄を多く含む。地山（風化礫層）が直下に見られる範囲においては、10～30cm程度の間隔で、風化礫層の高まりが見られた。H19の4b層に対応か。ただし風化礫層の大ブロックが混入しているような場合もあり、判然としない箇所もある。

3-1： 黑褐色風化礫混じり粘土（10YR3/1）しまり強い。粘性強い。3-1層をベースに地山（風化礫層）由来と思われるφ 8mm程度の黄褐色粒子をやや多く含む。H19の5層に対応か。

3-2： 黑褐色粘土（10YR3/1）しまり強い。粘性非常に強い。斑鉄を含む。かなり均質で、粒子の細い粘土である。H19の5層に対応か。

3-3： 黑褐色風化礫混じり土（10YR3/1）しまり強い。粘性強い。3-2層由来の粘土と、地山（風化礫層）由来の土が5：5程度で入り混じる。

4： 黑褐色砂利混じり土（2.5Y3/1）しまり強い。粘性強い。黒褐色粘土をベースに、φ 5mm程度の砂利を多く含む。縦長の斑鉄が非常に多く見られ、全体的に赤褐色が付いている。この層より遺物の量がやや増える。H19の6層に対応か。

5-1： 黑褐色粘質土（10YR3/1）しまりやや強い。粘性強い。粘土の粒子はやや細く、比較的均質である。斑鉄を含む。弥生土器を多く含む。この層中、あるいは5-2層の上面において、完形に近い甕がつぶれて2点検出された。

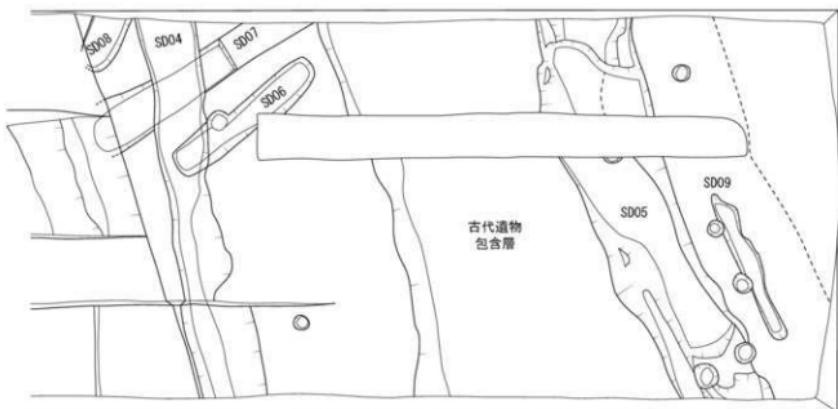
5-2： 黑褐色粘土（10YR3/1）しまりやや強い。粘性やや強い。斑鉄が見られる。

5-3： 褐灰色粘土（N4）しまり強い。粘性非常に強い。キメの細い均質な粘土である。

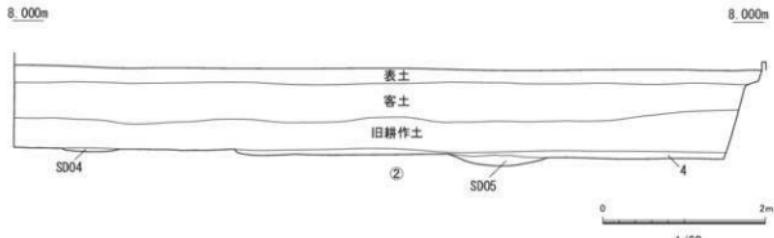
5-4： 黑褐色粘質土（10YR3/1）しまりやや強い。粘性強い。5-1層に似る。地山層由來の風化礫を傾斜に沿うように多く含む。

5-5： 褐灰色砂礫混在土5～20cm円礫が多数混在。最下面には人頭大の円礫が多量に見られた。礫にはさまづて遺物を多く検出した。H19調査の7層に対応か。

（5-1層から遺物量、礫の混入が多くなるが、5-5層は礫が非常に多い。H19調査の7層と対応するのは、5-5層と思われる。）



第8図 1区東側遺構平面図 (1/60)



第9図 1区東側北壁土層図 (1/60)

無遺物層（地山）

- ①：オリーブ褐色風化礫層 (2.5Y4/3) しまり非常に強い。粘性弱い。風化礫が7～8割程度を占める。
- ②：黄褐色シルト (2.5Y5/3) しまり強い。粘性強い。原の辻の多くの地点で弥生の横出面となる地山層。

SD04 土層注記

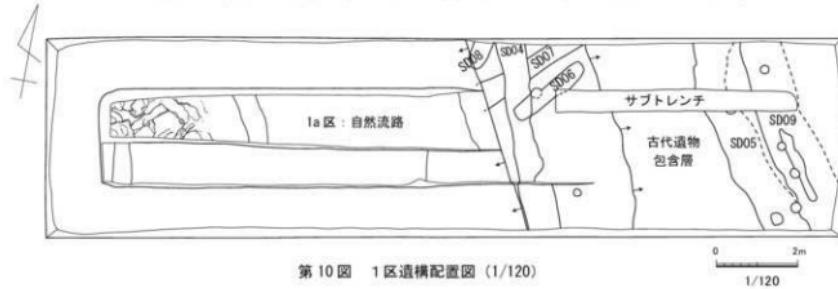
黒褐色粘質土 (10YR3/2)：しまりやや強い。粘性強い。旧耕作土と色調、質感ともに似る。

SD05 土層注記

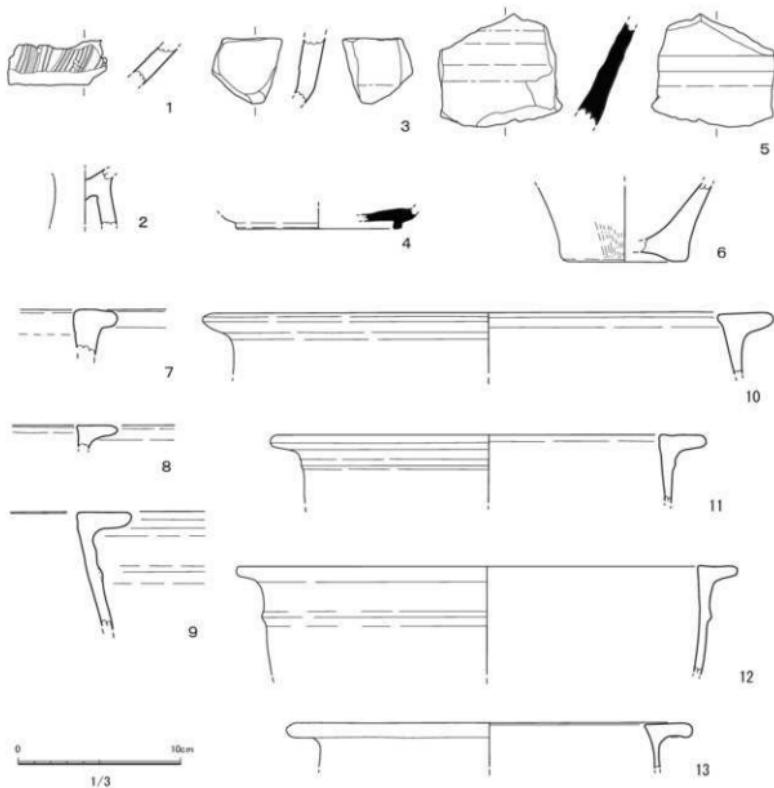
灰褐色粘質土 (10YR5/8)：しまり強い。粘性強い。
キメの細い褐色の粘土に地山層（砂礫層）由来の乳白色・黄褐色礫（中1～2cm）が多量に混じる。下層ほど混入具合が著しい。

SD09 土層注記

暗褐色粘質土 (10YR3/4)：しまり強い。粘性強い。約0.5～1.0cm程度の乳白色・黄褐色礫を多量に含む。
サブトレンチで観察した。調査終了際に、かろうじて溝状に見えたため、この範囲を SD09 とする。



第10図 1区遺構配置図 (1/120)

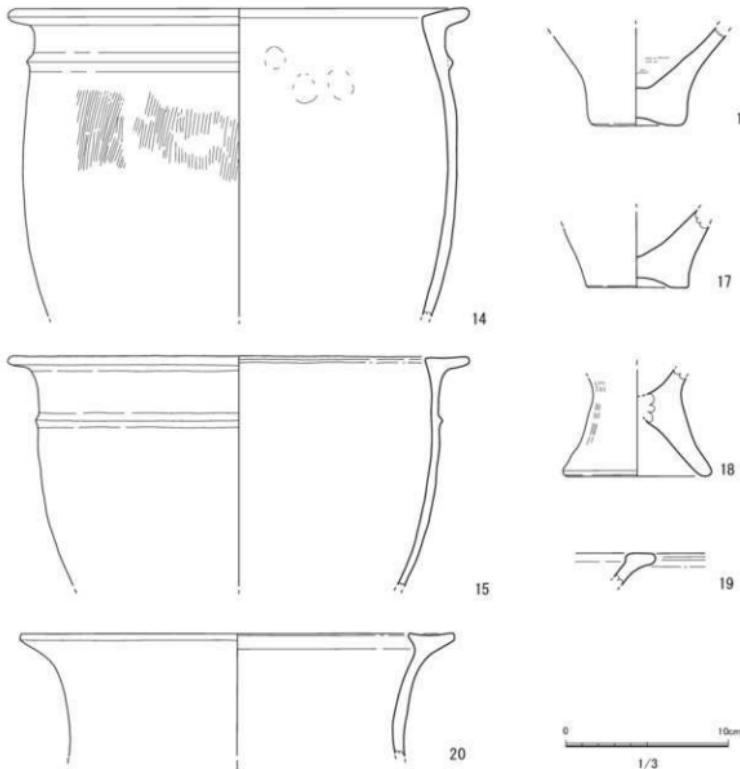


第11図 流路1層、流路2層、流路4層、流路5-1層出土遺物(1/3)

を除去したところ、調査区の西側においては自然流路の堆積が確認された（第6、8図）。東側においては、奈良時代以降の堆積土層（第9図の4層）の広がりが確認され、これを除去したところ、奈良時代以降と考えられる遺構（SD05、SD09といった構造遺構やその周辺のピット群）のプランが確認された（第7図）。

① 自然流路（第6・7図、写真1～3）

自然流路は、1区の西側（1a区）において、幅約11～12mにわたり検出された。北壁側が幅約11m、南壁側が約12mで、上流である北側から下流である南側に向かって川幅は広がるようである。流路の最下面是、風化玄武岩の岩盤層であり、検出面からの深さは約1.5mである。土層は、大きく5層に分層されるが、このうち1～3層を「粘土層」、4層を「砂利混じり粘土層」、5層を「大礫混じり土層」と大別できる（第8図）。平成19年度調査の層位との対応関係から、2層は中世の堆積層、



第12図 流路5-1層出土遺物(1/3)

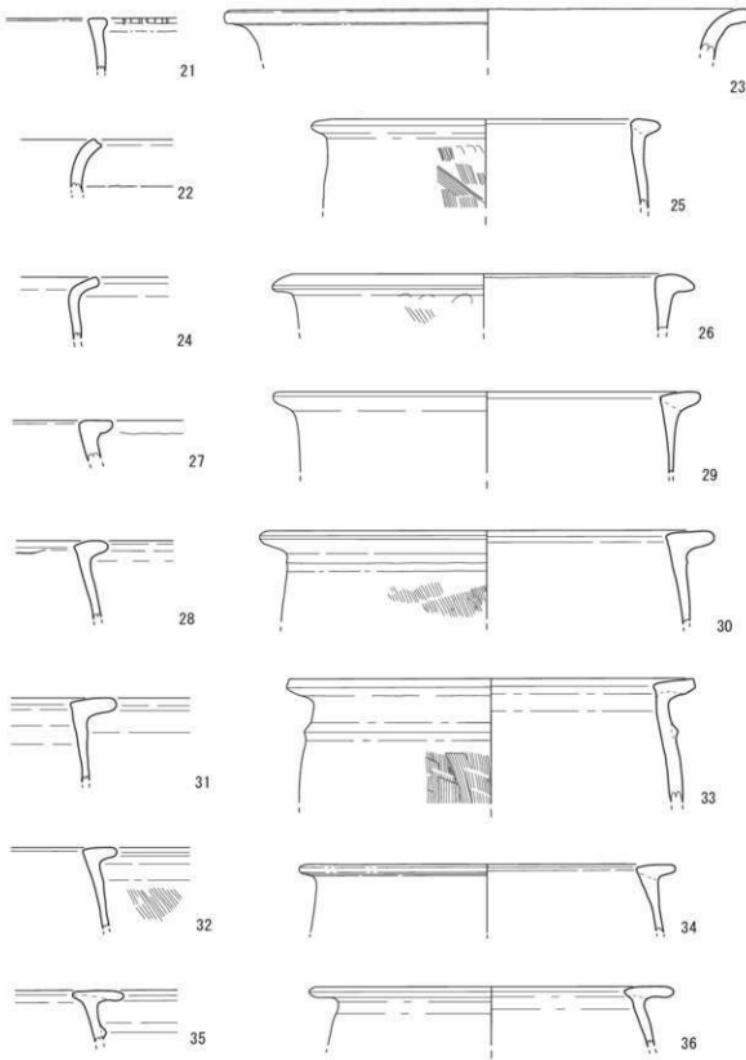
3～4層は古代の堆積層、5層は弥生時代の堆積層であると考えられる。このうち5層において遺物は最も多く見られ、その中でも4層の下で、大礫が比較的少ない5-1層より、弥生時代中期中葉の残存度の高い甕などが多く見られた（第12図14・15、写真3）。5層には前期後甕から中期後甕の土器が見られたことから、上記の残存度の高い甕と時期が逆転する。小河川の攻撃面であるため、周辺の遺構が削られて、転落したものと思われる。

1層から4層については、遺物の出土量が少なく、埋没時期について細かに知ることはできなかつた。1層から近世のすり鉢が、2-1層から捏ね鉢の胸部片が出土したのみである。

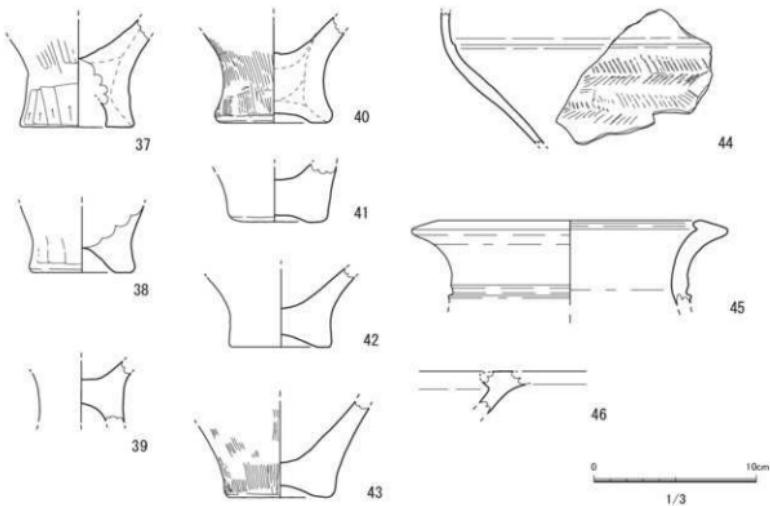
【出土遺物】（第11～17図、写真17、18、21）

〈出土土器〉

流路1層 1は擂鉢(すりばち)の胸部である。焼成はあまく土師質に近い。插目は8本1単位である。



第13図 流路5層出土遺物(1) (1/3)



第14図 流路5層出土遺物(2) (1/3)

流路2-1層

2は高杯の脚部である。器壁は摩滅が進む。3は器種不明の土器片である。やや屈曲する形状から胴部下半であると判断される。鉄分の沈着により茶色みを帯びるが、灰色と白色の胎土が交互に薄く重なる特徴から、楽浪系土器の可能性が考えられる。4は須恵器の杯身の高台部分である。

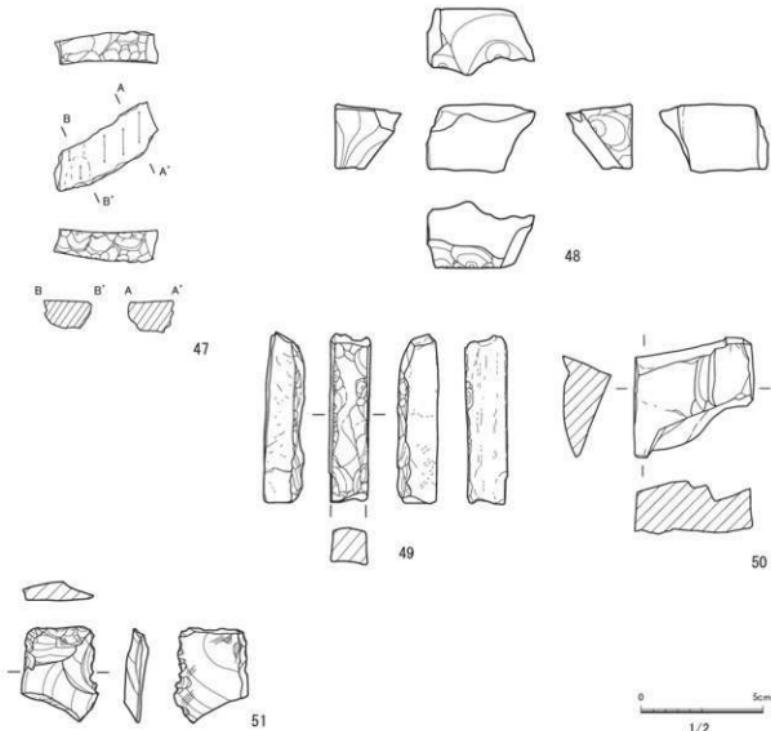
5は須恵質の捏ね鉢の胴部片である。内外面にヨコナデを施すが、凹凸は内面の方が明瞭である。

流路4層 6は弥生時代の甕の底部である。やや上げ底である。

流路5-1層

7～17は甕である。7～13は口縁部のみ残存する(7点)。7は断面逆「コ」字形を呈す。突出が短く器壁が厚い。10は断面「L」字形を呈す。上面はほぼ水平である。復元口径35.0cmを測る。11～13は鋤先形口縁である。いずれも上面はほぼ水平である。12と13は、ヨコナデにより上面がやくぼむ。14と15は口縁部から胴部にかけて残存する。14は内側に傾く口縁部が断面逆「L」字形を呈す。内面側の口縁部下にはユビオサエの痕跡が見られる。口径28.3cm、胴部最大径26.7cmを測る(写真17)。15は鋤先口縁を持つ。上面はほぼ水平であるが、上面はヨコナデによってやくぼむ。口径28.4cm、胴部最大径25.0cmを測る(写真18)。16と17は甕の底部である。いずれも器壁が分厚く、底部外面の中央に深くくぼみを持つ。16は内面にユビオサエの痕跡が目立つ。底部径6.6cmを測る。17は底部径6.8cmを測る。18は台付甕の底部である。外面にはハケメを施す。有明海沿岸地域からの搬入品と考えられる。

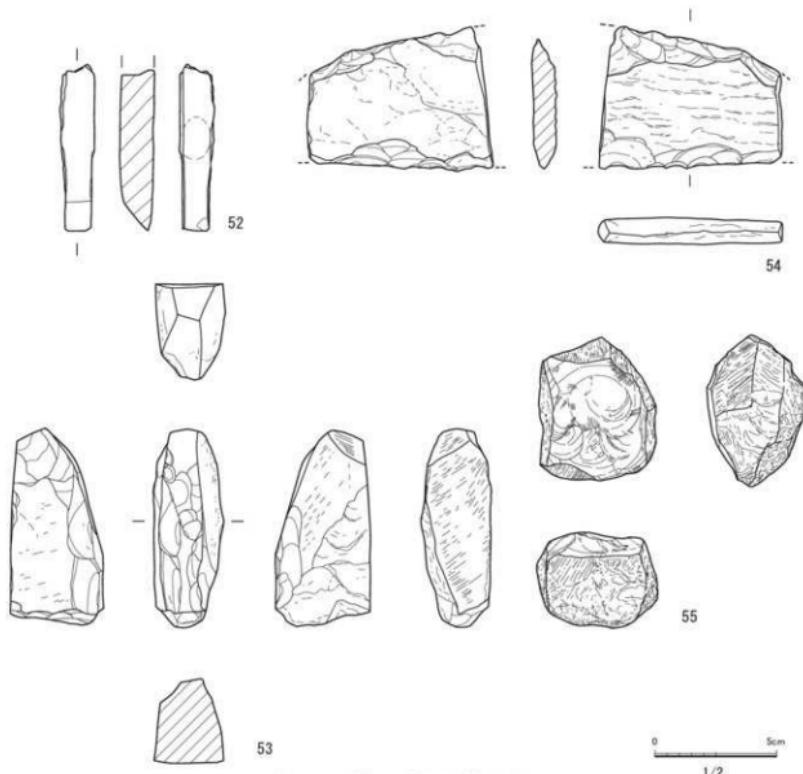
19と20は鋤先口縁壺の口縁部である。20は上面がほぼ水平であるが、中央部がやくぼむ。歪みが大きいが、復元口径26.7cmを測る。



第15図 流路2-1・2-2層、流路4層出土遺物(1/2)

流路5層(5-2、5-5層)

21～36は甕の口縁部である。21は口縁がおおむね直し口唇部がやや肥厚する。外面端部に浅い刻目をもつ。22、23、24は口縁が外反するものである。22は外面に浅い沈線が廻る。24は口縁端部が湾曲気味に外反する。25と26は、口縁端部が断面三角形を呈す。25は口縁部にヨコナデを施し、胴部には目の細かいハケメを施す。復元口径は21.0cmを測る。26は外面口縁部の屈曲部にユビオサエの痕を残す。復元口径は26.0cmを測る。27～34は断面形逆「L」字形を呈す。27は成形時のゆがみが大きい。28は内面の口唇端部のヨコナデにより、内面側に余った粘土が重なる。31、32は口縁部の下に、ヨコナデによるごく弱い突帯が廻る。33は全体に器壁が厚い。口唇外面端部が沈線上に浅くくぼむ。34は上面がほぼ平坦である。35、36は鋸先口縁である。外面端部がやや垂れ下がる。37～43は甕の底部である。37と38と39は中央部分に深いくぼみを持つものである。37のくぼみ部分には、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。外面下端部は、板状工具による強いナデを施す。40と41は、非常に分厚い底部である。40は端部がやや外反する。中央部分の浅いくぼみには、ユビオサエの痕跡が見られる。41は端部が直線的にややすぼまる。42と



第 16 図 流路 5-1 層出土遺物 (1/2)

43 はやや分厚い底部である。中央部分にくぼみを持ち、端部に向けて垂直あるいはややすばまる。44 は接地部分の器壁の剥落が著しい。44～46 は壺である。44 は壺の頸部から胴部である。頸部には突出の弱い突帯が一条めぐり、胴部には 2 組の貝殻羽状文がめぐる。45 は肥厚した平坦口縁を持つ壺の口縁部から頸部である。頸部には深い沈線によって作出される突帯がめぐる。復元口径 19.4cm を測る。46 は鋤先口縁壺の口縁部である。

〈出土石器〉

流路 2-1 層、2-2 層

47 は砂岩製の砥石の再加工品である。砥ぎ面の上下と裏面を打ち欠いて棒状の形状を作出している。48 は層灰岩製の不明石製品である。平坦面を一面のみ入念に研磨しており非常に平滑である。

流路 4 層

49 は層灰岩製の石器の未成品である。形状と法量から、整形石斧の未成品と考えらえる。両側面は葉理面を残す。背面から敲打による成形の途中で破断し、廃棄したものと思われる。50 は層

灰岩の石器の素材であると考えられる。細かな加工の痕跡は見られない。**51**は黒曜石の剥片である。細かな加工も見られるが、打面と、腹面に向かって右側の側面に自然面を残す。

流路 5-1 層

52は層灰岩製の整形石斧あるいは扁平片刃石斧の一部である。左右側面および基部を欠損する。前正面、後正面ともに磨くが、特に前正面の研磨が入念である。前正面の中央部が浅くくぼむ。**53**は整形石斧の未成品である。石材は不明であるが、凝灰岩の可能性がある。特に基部側において、研磨が丁寧に施されている。**54**は玄武岩製の石鎌である。刃部側、背部側ともに細かい連続した加工が認められる。形状からも先端部近くであると考えられる。**55**は黒曜石の石核である。上面に不純物の少ないガラス質が見られるほかは、自然礫面に覆われている。また、打面調整等の加工の痕跡も見られない。

流路 5 層（5-2・5-5 層）

56は扁平片刃石斧である。刃部、基部の一部、後正面、前正面、両側面を研磨する。腹面はある程度平坦になるまで研磨されているが、連続剥離によるリング状の凹凸を残し、完全には平坦になるまで研磨していない。刃部には最端部の研磨と、使用による刃こぼれが見られる。長さ 7.5cm、幅 3.4cm、最大厚 1.0cm を測る。**57**は層灰岩製の扁平片刃石斧、あるいは整形石斧の再加工品である。葉理に沿って破断したものと考えられるが、両側の葉理面に対して研磨を施す。長さ 4.0cm、幅 0.9cm、厚さ 0.9cm を測る。**58**は頁岩製の磨製石剣である。向かって左側を表面、右側を裏面とすると、表面は中心の鏽を中心に、両側に研磨が施される。左側刃部には使用による刃こぼれが見られる。右側刃部には刃こぼれは見られず、平坦な面をなしており、元々銳利に砥ぎ合わせていないようである。裏面は左右の刃部からそれぞれ幅 1.5cm 程度の範囲に研磨が施されるが、中央部分には研磨が及ばず、鏽が形成されていない。幅 4.2cm、厚さ 0.8cm を測る。**59**は黒曜石の縦長剥片である。細かな刃部の加工は見られない。長さ 8.6cm、幅 5.0cm、厚さ 1.1cm を測る。

『弥生時時代遺構』

② SD06（第 8 図、写真 6）

幅約 0.35 ~ 0.45m、長さ約 2.1m、検出面からの最大深度は 0.18m である。SD04 に切られる。

【出土遺物】（第 18 図 61・62）

60は弥生土器の甕の底部片である。外面端部が外に張り出す。

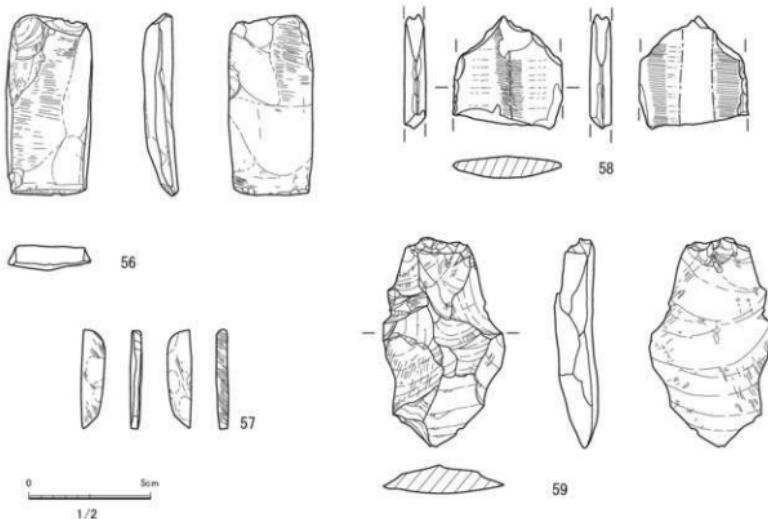
61は砂岩製の石鎌である。刃部には刃こぼれが見られる。峰には加工の痕跡が見られるが明瞭ではない。裏表両面に研磨を施すが、裏面（図の右）では最肥厚部となる中央部分に研磨が施され、鏽はみられない。最大幅 3.8cm、厚さ 0.5cm を測る。

③ SD07（第 8 図、写真 6）

幅約 0.45m、確認された長さは約 2.9m、検出面からの最大深度は 0.19m である。SD04 と自然流路に切られるが、SD04 に切られた箇所においては、遺構の底部のみが確認される。

【出土遺物】（第 18 図 62 ~ 65）

62 ~ 65は、甕または鉢の口縁部である。**62**と**63**は断面形が逆 L 字形を、**64**は鋤先形を呈する。



第17図 流路5層(5-2・5-3層)出土遺物(1/2)

65は内面を欠損するが、断面逆L字形あるいは鉗先形を呈するものと思われる。

④ SD08 (第8図、写真6)

幅約0.45m、確認された長さは約0.8m、検出面からの最大深度は0.11mである。自然流路に切られる。
【出土遺物】(第18図66)

66は、壺あるいは短頸壺の口縁部である。短く「く」の字に立ち上がる。全体的に器面が摩滅しく器面調整は不明である。金雲母を多く含む。

《古代・中世遺構》

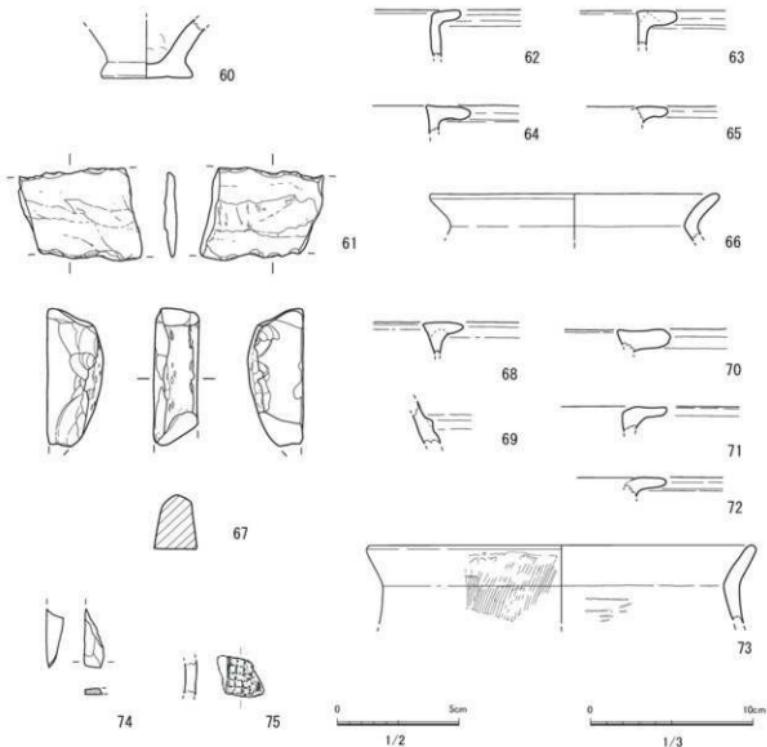
調査区の東端から西に5～6mの範囲において、厚さ10cm程度の黒褐色土の堆積が見られた。この層(4層)は奈良～平安時代の遺物を包含するが、この層を掘削したところ、SD05、SD09といった遺構が確認された(写真4、5)。

⑤ SD04 (第8図、写真5)

幅約0.7～0.9m、確認された長さは4.8m程度、検出面からの最大深度は0.09mである。弥生時代の溝状遺構SD06、SD07を切る。検出範囲においては自然流路との切り合いは確認されず、自然流路に沿うようにして確認された。

【出土遺物】(第18図67)

67は層灰岩製の鑿形石斧である。刃部側を欠損する。左側面は葉理面を多く残すが、右側面は剥



第18図 SD06・SD07・SD08、SD04・SD05、遺物包含層、旧耕作土出土遺物
(61・67・74は1/2。それ以外は1/3)

離と敲打によって、葉理面は下方に部分的に残るのみである。再加工の工程において、おそらく後主面への敲打の際に刃部を欠損し、廢棄に至ったものと思われる。残存長5.7cm、幅1.8cm、高さ2.3cmを測る。

⑥ SD05（第8図）

幅約1.1～1.4m、確認された長さは約4.9m程度、4層（古代・中世の遺物包含層）掘削後の最大深度は0.22m程度である。

【出土遺物】（第18図 68・69）

68は甕または鉢の口縁部小片である。器壁の摩滅が著しく進む。69は壺の頸部の可能性がある小片である。一条の突帯が見られる。

⑦ SD09（第8図）

SD05に平行するように、幅0.3m程度、長さ2.2m程度、最大深度0.08m程度の土層の堆積が確認され、SD09として掘削を行ったが、調査の最終段階で、SD05にはほぼ並行しながら切られる、残存幅1.2m程度の別構の埋土の一部であると考えられることが判明した。そこで、第7図のようにおおよそ破線で示した範囲が溝状遺構の範囲と考えられるが、詳細は不明である。

その他の出土遺物

4層出土遺物（第18図70～74）

70～72（口縁部3点）は弥生時代の甕あるいは鉢の口縁部である。いずれも小片であるが、逆L字口縁、あるいはあまり発達していない鋤先口縁であるものと思われる。73は奈良時代から平安時代にかけての甕の口縁部である。外面は口縁直下までハケメを施した後、板状工具による斜め方向のナデを施し、口唇部にヨコナデを施す。内面は、口縁部にヨコナデを、脣部にヘラケズリを施す。

74は層灰岩製の扁平片刃石斧あるいは整形石斧の一部である。

旧耕作土内出土遺物（第18図75）

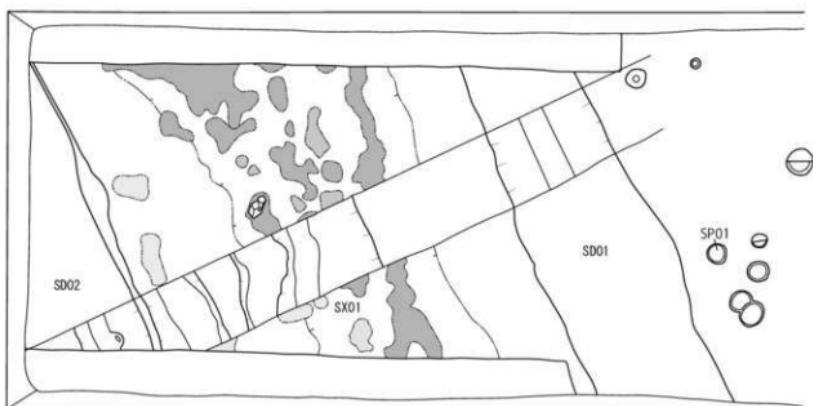
75は三韓系瓦質土器の小片である。外面は格子タタキが明瞭に見られ、内面には当て具痕は見られない。

（2）2区の調査（第19～34図、巻頭カラー写真5～7、写真7～15）

2区は、「②古代の道路の有無と、実態の解明」を目的として調査を行った。重機掘削の結果、2区は調査区中央やや西寄りに、溝（現代・SD01にほぼ重なる）が北西南東方向に向かって見られ、その東西で堆積状況は大いに異なることが確認された。

西側では客土下に旧耕作土と考えられる粘質土がみられ、褐色粒子や遺物の包含具合から、3つの層に細分された（2-1～2-3層）。しかし本質的な差異はないものとみられる。2-3層から貿易陶器の青磁小片を検出したことから、中世の堆積層である。この下には固くマンガン粒が沈着する層（3層）が見られたが、これを除去したところ、調査区西端に溝状の遺構（SD02）が確認された。これを西側側溝として、また上記の溝（現代）のほぼ真下に見られる溝状遺構（SD01）を東側側溝として、そしてその間に見られる砂利層の広がる範囲が道路状遺構の可能性があるものとして調査を行った。（第19図、巻頭カラー写真5）

これに対して調査区の東側は削平が進み、西側で見られた粘質土は見られず、一部は地山直上まで現代のバースなどを含む層が見られた。これを除去したところ、弥生時代中期中葉を主体とする堅穴建物が複数切り合う様相が確認された（巻頭カラー写真7）。調査の結果、4棟あるいは5棟の堅穴建物が存在した可能性が示された。地山に対して直線的に遺構が切り込む様相から、これが堅穴建物の平面プランであることが十分に想定されたため、複数回にわたり精査を行った。暗褐色粘質土（10YR3/3）の広がりの中から遺構の平面プランを見出すのは困難を極めたが、辛うじて3基（SI01, SI02, SI03）の堅穴建物の平面プランを見出すことができた。そして、それぞれが本当に堅穴建物の平面プランであるのか、またその時期と構造はどのようなものであるのか、ということを把握

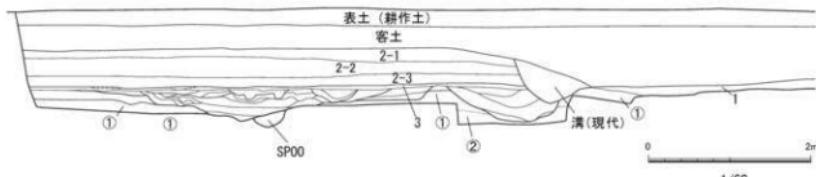


■乳白色、茶褐色の砂利が多い範囲 ■乳白色、茶褐色の砂利がやや多い範囲 □乳白色、茶褐色の砂利が見られ、φ 5cm 程の風化礫が見られる範囲

第19図 2区西側造構平面図 (1/60)

8,000m

8,000m



第20図 2区北壁西側土層図 (1/60)

2区北壁土層図 土層注記

表土：(耕作土)

客土：(圃場整備地区土層) 西端から 7m 程度の場所に南北方向の現代かく乱溝（菓子の包み紙など含む）が見られるが、かく乱溝の東側においては、客土層が厚く見られ、1 層の直上までバラスがおおよぶ。

1: にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強い。粘性強い。灰色がかった粘土がほぼ全面に見られ、これらを完全に除去して初めて弥生の遺構のプランを確認できた。

2: 旧耕作土か

2-1: 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強い。粘性強い。客土由來の風化礫や黄褐色粒子が多く沈み込む。(一人力掘削はこの面から)

2-2: 暗褐色粘質土 (10YR3/3) しまり強い。粘性強い。黄褐色粒子をまばらに含むが、比較的均質である。

2-2 層に比べて暗い色合いを呈す。

2-1 から 2-3 に掘り進むにしたがって、色調はやや暗くなり、遺物の量も増加する。これによって 2-1 ~ 2-3 に分層したが、本質的な差ではないものと思われる。

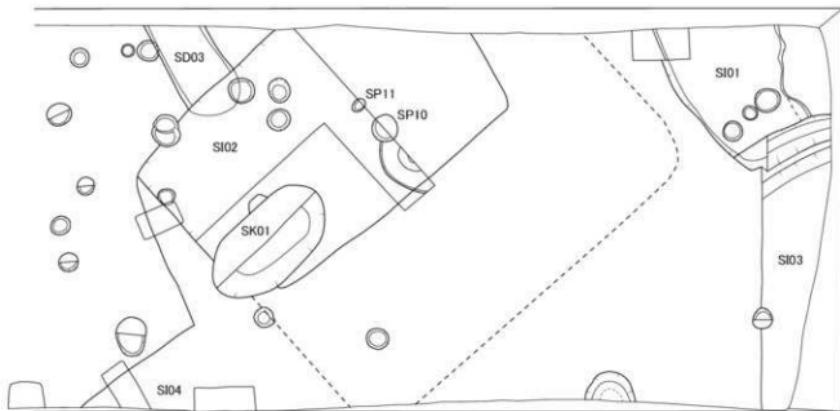
3: (マンガン粒沈着層) 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまり非常に強い。粘性弱い。φ 1 ~ 1.5cm の黒斑が非常に多く見られる。2 層との関係で沈着したものと見られ、古代道路状遺構、また SD01 の上面において、粘土層の場合は厚く沈着し、砂利層の場合はあまり発達しない。(このため砂利層の範囲は破線で表現した)

SP00

暗褐色粘土 (10YR3/4) しまりやや強い。粘性非常に強い。(平面プランが丸くおさまることから、小ピットの埋土と考えられる。)

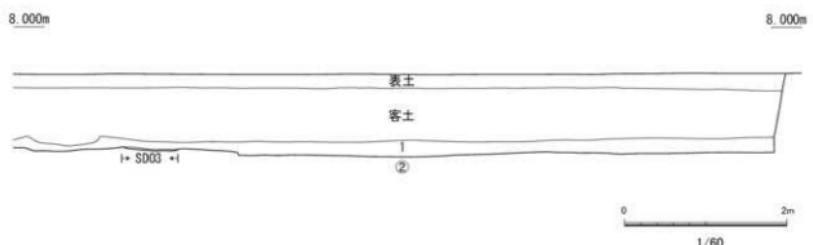
溝 (現代)

にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりやや強い。粘性強い。調査時には周辺土層との対比から灰色がかった見える。溝状に掘りくぼまったくこの範囲では接する土層を巻き込んでいる。(2区南壁にも同じ土層が見られるが、こちらは均質で、キメが細い粘土である)



第21図 2区東側造構平面図 (1/60)

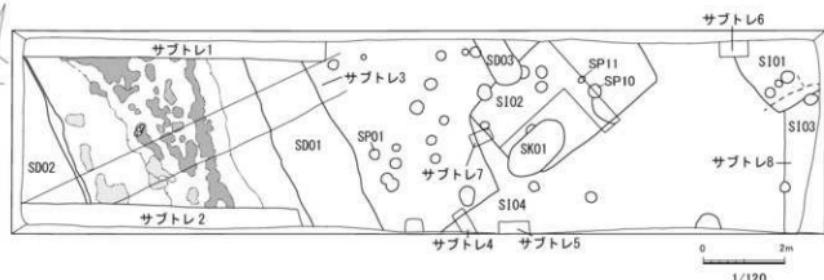
※破線はSI02推定線



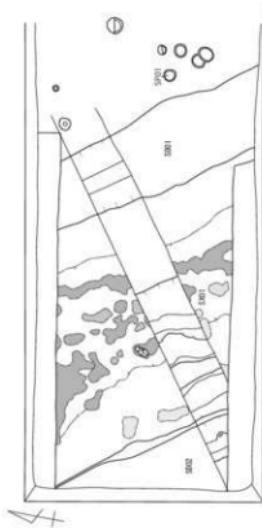
第22図 2区北壁東側土層図 (1/60)

SD03 土層注記

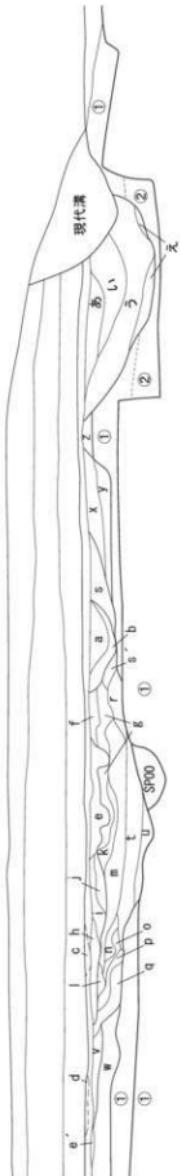
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 1層とほぼ同質で見分けがつかなかった。また、土量が少なく判断が困難。



第23図 2区造構配置図 (1/120)



第25図 2区サブトレンチ1・3北壁土層



第26図 2区北壁土層図 (1/30)

6,800m



第27図 2区サブトレンチ3北壁土層図 (1/30)

D01 土層注記

特に上面に厚さ4cm程度で樹脂の剥離が多くの箇所で見られる。また、特に樹脂の剥離が多いために下面に特に「くぼみ」や「くびれ」などの形状が見られる。

四三

工場等記
ア: 晴色地粘土 (10R3/4) しまり強。粘性強。
イ: 晴色地粘土 (10YR3/3) しまり弱。粘性弱。
ウ: 晴色は風化礫土 (10YR4/1) しまり強。粘性強。
エ: 晴色地粘土 (10R4/1) しまり強。粘性強。土のやや細かい、比較的均質である。

卷之三

a : 明褐色赤鉄土 (10YR3/3) しまり強い。粘性やや強い。
 b : 暗褐色赤鉄土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 c : 暗褐色赤鉄土層 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 d : c に同じ。e : c に同じ。f : 褐褐色土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 e : c に同じ。f : 褐褐色土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 f : 褐褐色土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 g : 前褐色色 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 h : 前褐色色 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 i : c 層に似る。j : q 層に似る。k : m 層に似る。l : n 層に似る。m : 背地赤鉄土質土 (10YR2/2) しまり強い。粘性やや強い。
 n : m 層に似る。o : p 層に似る。p : h 層に似る。q : m 層に似る。r : 腐殖化土質土 (10YR4/3) しまり非常に強い。粘性やや強い。
 s : r 層に似る。t : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり強い。粘性やや強い。
 u : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまりやや弱い。粘性やや弱い。
 v : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり強い。粘性やや弱い。
 w : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり強い。粘性やや弱い。
 x : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや弱い。
 y : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや弱い。
 z : 腐殖化土質土 (10YR3/3) しまり非常に強い。粘性やや弱い。

113

無機物質——(山) **赤色風化礫** (2, 674/3) しまり非常に強い。粘性弱い、暗褐色 (10YR3/4) の粘土をベースに ϕ 1cm 程度の乳白色及び褐褐色の風化礫が 7~8 刻り程

この堆積は2区の西北側と1区の東側に見られる。
この堆積は2区の西北側と1区の東側に見られる。

する目的でサブトレーンチ4～7を設定し、調査を行った（第23図）。

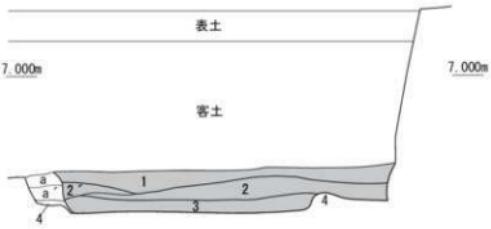
《弥生時代遺構》

① SI01（第21・28・29図、写真10）

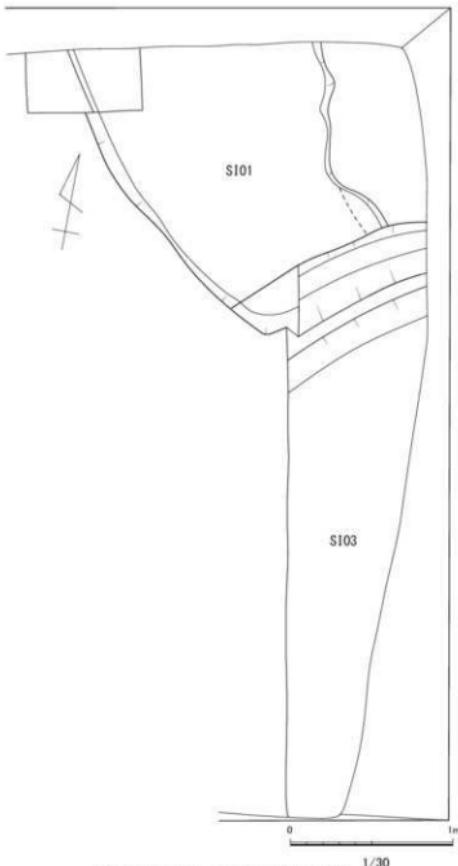
トレーンチの北東側に、幅1.85m、長さ2.1mの範囲において検出された。検出面からの床面までの深さは0.2m程度で、上部をある程度削平されているものと判断される。おおむね北西南東方向に主軸を持つ、方形あるいは長方形の竪穴建物であると思われるが、詳細については不明である。平面プランの西壁から、東におおよそ1.0m程度の位置に、西壁とおおむね並行するようにして、高さ0.05m程度の高まりが確認された。

② SI02（第21・31～33図、写真11・12）

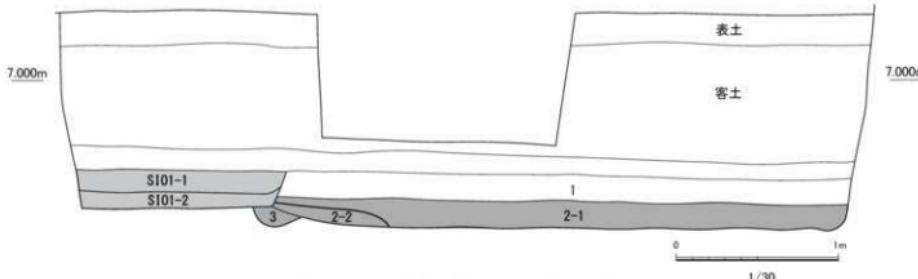
平面プランの検出作業により幅2.5m、長さ4.25mの範囲が竪穴建物のプランと判断されたため、SI02として調査を行った。この範囲の西側4分の1と、北東西南方向の中心線より東側を幅0.5m、合わせるとL字型に掘削して、この竪穴建物の構造の把握を目指した。その結果、掘削した北東西南方向のサブトレーンチの東側から、炉跡と思われる遺構（第31図、写真11）が確認された。この位置から炉跡が検出されたことから、①SI02が切るさらに別の竪穴建物の炉跡であるか、あるいは②SI02の平面プランとして把握した範囲が、炉跡を中心とするより大きな平面プランの一部であり、埋土の違いを竪穴建物の範囲と誤認したか、二つの可能性が考えられる。SI02として掘削した範囲において、さらに別の平面プランが確認されないことから、後者（平面プランの誤認）である蓋然性が高い。



第28図 SI01 北壁土層図 (1/30)



第29図 SI01・SI03 平面図 (1/30)



第30図 2区東壁サブトレンチ土層図 (1/30)

S101 北壁 (第28図) 土層記述

- 1: 黄灰粘質土 (2.5Y4/1-5/1) 粘性、しまりやや強い。マンガン斑まれ。粗砂大～0.5cmの白・黄色粒多い。地山ブロック? (地山と同色だが粘性はやや弱い) をまれに含む。
- 2: 暗灰黄粘質土 (2.5Y5/2-4/2) 粘性、しまりやや強い。マンガン斑みられる。粗砂大～0.5cmの黄・白色粒、土器小片らしき椎形粒まばら、ところどころ粘性の強い同色ブロックがみられる。2-1部分は1層とのまじりか? 粘土ブロックみられず黄色粒多い。
- 3: 暗灰黄粘質土 (2.5Y5/2) 粘性、しまりやや強い。地山由来ブロック (浅黄へにぶい黄褐色粘質土 (2.5Y7/4-10YR7/2) を含む。まれに鉄分の沈着がみられる。
- a: (包含層) 2.5 Y 4/1-4/2 粘質土。白・橙色粒。微細な炭化物まれに含む。
- 4: 黄褐色シルト (2.5Y5/3) しまり強い。粘性強い。(地山層)

2区東壁サブトレンチ土層記述 (第30図)

- 1: 暗褐色粘質土 (10YR3/3) しまり強い。粘性強い。マンガン粒が多く見られる。炭を含む。
(S101 や S102 がこれを切ることは確実である。しかし 2区調査区の西半分に広く見られるこの層位の上面では、平面プランが範囲にいくつも遺構の埋土か、遺物包含層か判断がつかない場合も多かった。)
- 2: S103 埋土
 - 2-1: 黒褐色粘質土 (10YR3/2) しまり強い。粘性強い。1層に比べて炭を多く含み、暗い色合いを呈す。
 - 2-2: 黒褐色粘土 (10YR4/2) しまり強い。粘性強い。2-1層とほぼ同質であるが、地山由来の粘土がやや多く混じり、粘質がやや広い範囲を分層した。
- 3: にぶい黄褐色粘土 (10YR4/3) しまり強い。粘性非常に強い。マンガン粒を含む。

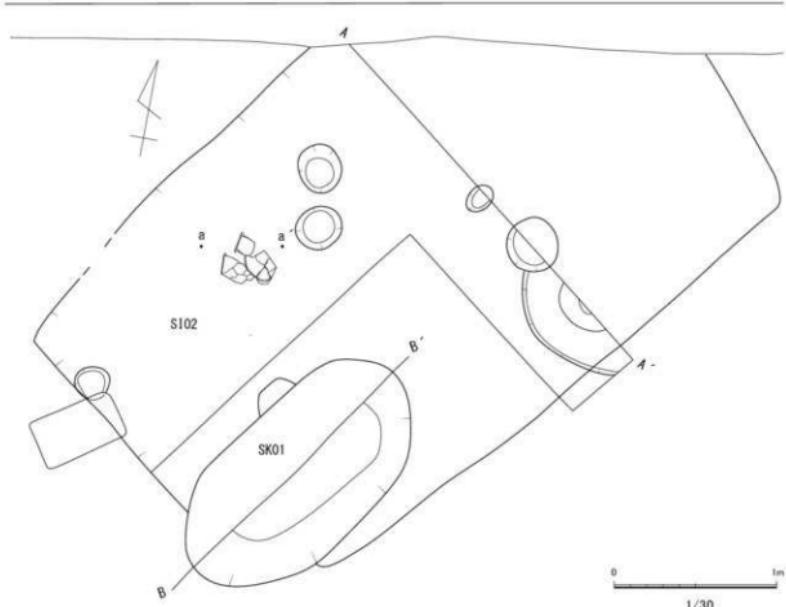
炉跡が堅穴建物の中心に作られたと仮定して、南北およそ4.7m、東西およそ5mの方形に近い平面プランを仮定できるが (第21図)、調査期間が十分でなかったため、これ以上明らかにすることはできなかった。また、床面上から須玖I式古段階の甕が検出された (第31・33図、写真12)。

【出土遺物】(第35図、写真19、20、22)

76と77は甕である。76は断面形逆「L」字形で内側にやや傾く口縁をもつ。胴部の膨らみはそれほど強くなく、底部はやや分厚い。器高22.2cm、口径19.8cm、胴部最大径17.6cmを測る。床面直上より出土した (写真19)。77はやや小さな鋤先形口縁であり、ほぼ水平に作られる。遺構の埋土中より出土した (写真20)。78は高杯の鋤先口縁である。79は器種不明の小形土器の底部である。外面下半には、板状工具による強いナデが左から右に施され、底部上半は上下方向のナデを施す。内面には工具痕が深く刻まれ、平滑ではない。胎土は、混和材がごくわずかで極めて緻密であり、焼成も極めて良好である。

これらの遺物から、S102は須玖I古段階に使用され、須玖I新段階にかけて埋没したものと判断される。

80は層灰岩製の盤形石斧である。後主面は研磨が施されるが、両側面に葉理面を残し、前後に加工の痕跡が見られないことから、破断した破片であると判断される。81は層灰岩製の柱状片刃石斧の未成品である。右側面は葉理面を残し、左側面には前主面からの剥離が見られる。後主面には左側



第31図 SI02・SK01 平面図 (1/30)

面側は粗く打ち欠く敲打が見られ、右側面には細かくなめらかの敲打が見られる。長さ7.8cm、幅3.7cm、厚さ2.6cmを測る。

③ SI03（第21・29・30図、写真13）

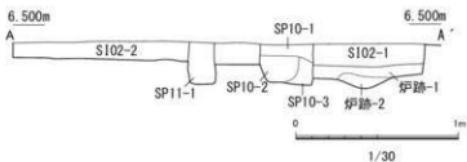
SI01の調査後、南側の範囲において、別の遺構が地山に切り込む様相が確認された。この遺構の性格を解明する目的で、2区東壁におおむね沿うようにサブトレーン8を設定した。この結果、北側に幅0.25m程度、深さ0.1m程度の浅い溝が、弧を描くようにして確認され、また地山に切り込む遺構の床面も、ほぼ平坦であることが確認された。このことから、これは周囲に浅い溝を持つ円形堅穴建物であると判断される。炉跡や柱穴などは確認されなかった。

【出土遺物】（第35図82・83）

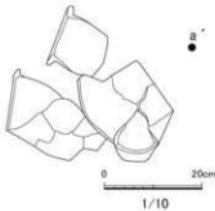
82は甕の口縁部である。口縁部は断面「コ」の字形を呈す。口縁端部には、浅い刻目が施される。83は、無頸甕あるいは小形鉢の口縁部である。

④ SI04（第21図、写真15）

上述のように、結果的にSI02の平面プランは、より大きな堅穴建物の埋土の一部を堅穴建物の平面プランとして誤認した可能性が高い。しかしながら、確実にこれと切り合いを持つ遺構が存在し、これをSI04とする。



第32図 SI02サブトレンチ土層図(1/30)



第33図 SI02床面直上土器出土状況(1/10)

SI02サブトレンチ土層注記

SP10-1: 黄灰(2.5Y5/1) 粘質土 しまり、粘性やや強い。粗砂大の白色粒。0.5cmの黄色ブロックまれに含む。
 SP10-2: 灰灰(10YR4/1) 粘質土 しまり、粘性やや強い。粗砂～極粗砂大の白・橙色粒、炭化物まばらに含む。
 SP10-3: 黄灰(2.5Y5/1) 粘質土 しまり、粘性やや強い。細砂～極粗砂大の白色粒まれに含む。
 SP11-1: 喙灰黄色(2.5Y5/2) 粘質土 しまり、粘性やや強い。粗砂大～0.5cmの白色粒まれに含む。
 SX01-1: 暗灰色(10YR4/1-5/1) 粘質土 しまり、粘性やや強い。粗砂大～0.5cm白・黄色粒、くされ縫をまばらに含む。マンガん粒まれに含む。灰黄色粘質土ブロックまじる。(SI02埋土)
 炉跡-1: 黄灰(2.5Y4/1) 粘質土 しまり、粘性やや強い。粗砂大～0.5cm白・黄色粒、くされ縫をまばらに含む。
 炉跡-2: 灰灰(2.5Y6/2) 粘土 しまり、粘性強い。微細な橙色土ブロック。炭化物含む。明赤褐色～暗褐色(GVRS/8-7, GVRG/8)を呈し、赤褐色(2.5YR4/8)の硬質なブロック(径0.5～1cm)を含む。底部は全体的に赤褐色(暗赤褐色)となる。



第34図 SK01土層断面図(1/30)

SK-1 土層注記

1: 灰灰(10YR4/1) 粘質土、粘性、しまりやや強い。土器小片、粗砂大～0.5cmの白・橙色粒をまばらに、微細な炭化物まれに含む。
 2: 黄褐色(2.5Y5/3) シルト しまり強い。(地山層)

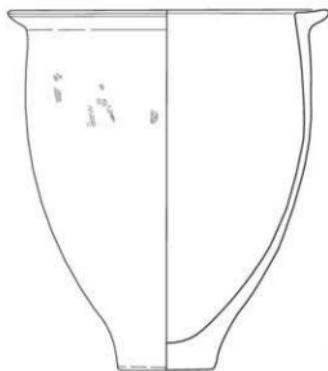
まず、この範囲にサブトレンチ4を設定して土層観察を行ったところ、炭を含む層が、地山を切り込んで厚さ10cm堆積する状況が確認されたことから、これは大形の遺構の一部であると判断される(写真15)。また地山を切り込む遺構が、ほぼ直角に交差する位置から、南側に直線的に伸びた位置において、両者の切り合いかが見られないかを確認したところ(サブトレンチ5)、明確な切り合い関係は見られなかった。このため、ここでSI04とした遺構はSI02の南側にどれだけかの広がりを持つものと判断されるが、それ以上明らかにすることはできなかった。

(5) SK01(第21・31・34図、写真14)

北東西南方向に長軸を持つ、楕円形の土坑である。幅約0.8m、長さ約1.7mを測る。検出面からの深さは0.25m程度であり、最深部に向かってなだらかにすぼまる。SI02を切り、2区東側の遺構群の中で最も新しい遺構である。

【出土遺物】(第35図84)

84は、鋤先口縁を持つ小形の甕である。口縁部の上面は水平に近い。一条の突帯を持ちヨコナデを施すが、口縁部に施すヨコナデとの間が盛り上がり、突帯を呈している。胴部はかなり丸い。口径19cm、胴部最大径16.7cmを測る。須玖I式新段階のものであると考えられる。



76



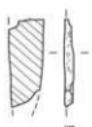
77



78



79



80



— —

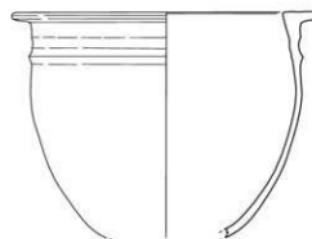


82



81

0 5cm
1/2



84

0 10cm
1/3

第35図 2区 SI02・SI03・SK01出土遺物 (80・81は1/2、それ以外は1/3)

『古代・中世遺構』

⑥ 道路状遺構（SD01、SD02、SX01）（第19図、巻頭カラー写真5、6）

2区の調査の目的として、「②古代の道路の有無と、実態の解明」を挙げたが、想定された位置において（※）、並行する2条の溝状遺構およびその間に、検出面に砂利が多く見られる遺構が確認された。このため道路状遺構の可能性を想定して調査を行った。遺構の土層と、地山層の状況を確認するために、2区北西隅に幅0.5m、長さ7.4mのサブトレーンチ1を、また2区の南西隅においては幅0.5m、長さ6.7mのサブトレーンチ2を設定し、SD02、SX01を断ち割るように掘削を行った。また、この道路状遺構に直行するように、幅1m長さ8.7mのサブトレーンチ3を設定し、掘削を行った（第19・23図、写真7・8）。

（※）2区の調査区設定にあたり平成7年度の調査区位置図を参照したが、現代の地図と合成するにあたり、重ねる場所を誤ったため、設定する位置がずれてしまった。

SD01（第19・26・27図）

検出された長さは約5m、幅約1.3～1.7m、検出面からの深さは約0.35mを測る。主軸は北西南東方向である。遺構の東側の立ち上がりはやや急であり、西側はやや緩やかである。土層図（第26・27図）に見られるように、北西隅のサブトレーンチ1と中央のサブトレーンチ3において、層位の対応関係が確認された。遺物は、弥生土器と思われる小片が出土するばかりであった。

SX02（第19・27図）

検出された長さは約4.5m、幅約1.5m、検出面からの深さは約0.2mを測る。主軸は北西南東方向である。遺構の西壁は、調査区外に伸びるものと考えられ、確認することができなかった。しかしながら、中央のサブトレーンチ3での土層観察から、本遺構は溝状を呈するものと判断される。遺構の壁の立ち上がりは非常にだらかである。

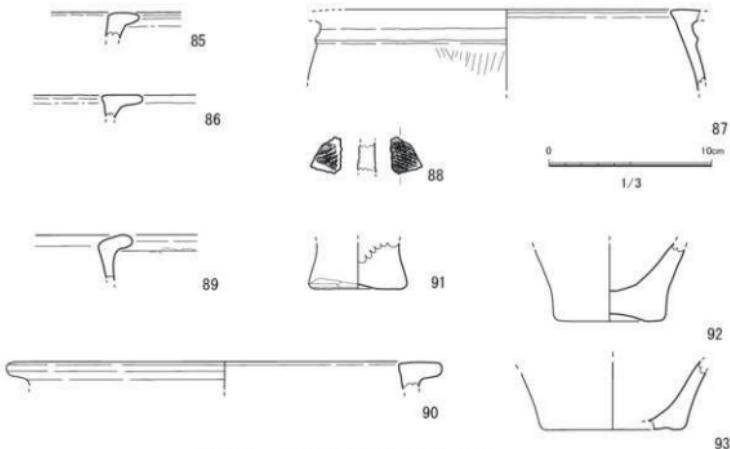
【出土遺物】（第36図85～88）

85～87は弥生時代の甕である。85は断面逆三角形を、86は逆「L」字形を呈す。87は口唇部を欠損するが、鋤先口縁である。88は須恵器の小片である。外面にはカキメが、内面には同心円の当て具痕の一部が見られる。

SX01（第19図、巻頭カラー写真5、6、写真7、8）

並行する2条の溝状遺構（SD01・SD02）に挟まれて、長さ約5m、幅約4.8mにおいて、検出面に黄褐色の砂利を多く含む範囲が分布する範囲が確認された。上記のように、3つのサブトレーンチを掘削したところ、SD01とSD02のほぼ中間に、おおよそ南北方向を軸とする溝状遺構が見られた。この遺構では、検出面において、長さ0.3m、幅0.15m程度の角礫が、7cm程度飛び出すようにして検出されたことが注目される。中世の耕作土と考えられる層位（2-3層）の直下に見られることと考え併せて、路面については、ある程度の削平がされているものと判断される。

IV章「総括」において詳述するが、この遺構の性格としては、①並行する2条の溝状遺構の芯芯間距離が平成7年調査の例と同じ6mであること、②検出面には、路面の補修に用いられた可能性があ



第36図 2区 SD02・SX01出土遺物(1/3)

る黄褐色の砂利が見られること、以上の①、②により、SX01は古代の道路で、SD01、SD02はその側溝であると判断される。しかしながら、遺構の年代を明らかにできる遺物は出土しなかった。

【出土遺物】(第36図 89～93)

89～93は弥生土器の甕である。89と90は口縁部である。断面「コ」の字形を呈す。91～93は底部である。91は円筒形の底部である。外面中央部分が緩やかにくぼむ。92は分厚い底部で、外面中央部がくぼむ。93は中央部分を欠損するが、底部は薄く、接地部分外周とその内側との間に、弱い段をもつ。

SD03(第21図)

弥生時代中期の堅穴建物 SI02 を切るようにして、幅0.7m程度、残存長1.4m程度の溝状遺構が確認された。これは当初想定された道路状遺構の、東溝の検出が想定される場所であったため、慎重に調査を行った。しかしながら、上記のように、弥生時代中期の遺構の上面を消失する程度まで、著しく削平が進んでいる場所であったため、溝状遺構の底の部分で、かろうじて平面プランを確認できたのみである。深さは2cmから3cm程度である。この一帯には、北西南東方向の区画が残されており、この溝状遺構も、そうしたもの一つであると考えられる。遺物は検出されず、時期は不明である。

その他の出土遺物(第37図 94～96)

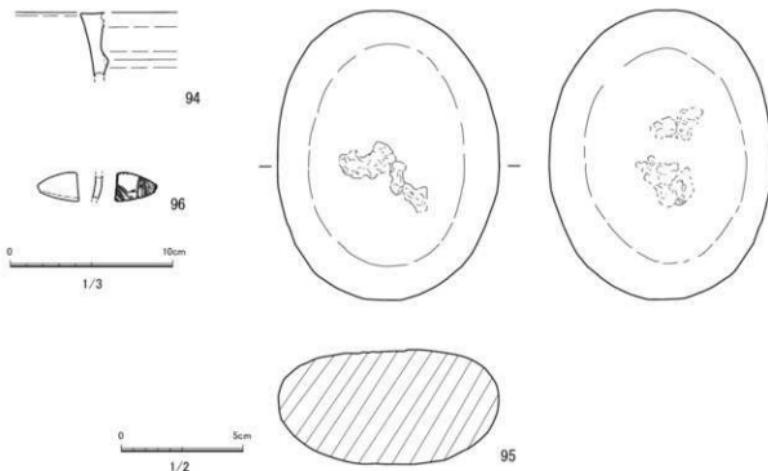
SP01出土遺物

94は弥生土器の甕の口縁部である。口唇部を欠損するが、断面鋸先形を呈するものと考えられる。

SP08出土遺物 95はたたき石である。

溝(現代・SD01を切る)出土遺物

96は染付の小片である。外面には発色の悪い呉須による連弁文が描かれる。素地は浅黄橙色を



第37図 2区SP01、SP08、溝（現代）出土遺物（95は1/2、それ以外は1/3）

呈しきめが粗い。漳州窯系染付の可能性がある。

遺物包含層出土遺物（第38図97～113）

1層出土遺物

97は磁器の椀あるいは皿の高台部分である。内外面に灰色味を帯びた釉薬を施す。見込み部は蛇目釉剥ぎを施し、細砂をごく薄く塗布する。外面下位は露胎である。見込みの蛇目釉剥部分および疊付部分とその内側は、明赤褐色に発色する（肥前波佐見18世紀後半）。98は玄武岩製の打製石鎌である。最大幅5.2cmを測る。99は層灰岩製の柱状片刃石斧あるいは扁平片刃石斧の刃部片である。

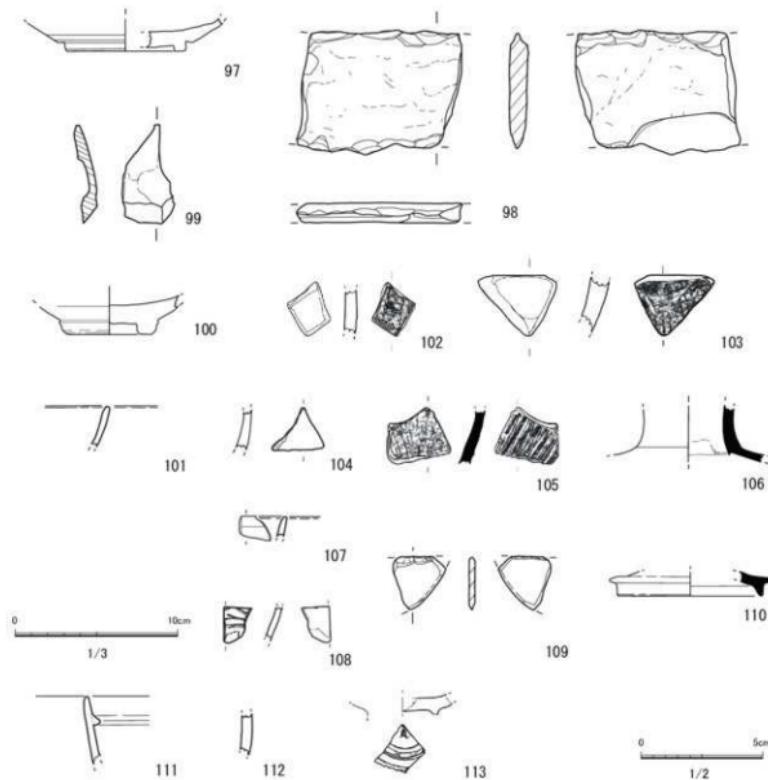
2-1層出土遺物

100は磁器の椀の高台部分である。内外面に灰オリーブ色の釉薬を施す。見込み中央部分は露胎であり、露胎部の周囲には細砂を塗布する。外面は疊付とその内側は露胎であるが、一部のみ釉薬と細砂が付着する。疊付の内側には粗雑なケズリ痕が残る。露胎部分はにぶい橙色に発色する。

2-2層出土遺物 101は黒色土器Bの椀の口縁部である。

2-3層出土遺物

102と103は三韓系土器である。102、103はともに外面に格子目タタキを施す。内面はナデを施し、当て具痕は見られない。104は器種不明、硬質の土師質土器小片である。105と106は須恵器である。105は壺の胴部片である。外面には平行タタキ目が、内面には格子目の当て具痕が見られる。106は壺の頭部である。胴部との境界に明瞭な段をもつ。107と108は青磁である。107は内面の口唇部直下に一条の沈線がめぐる。108は内面に文様を持つが、草花文の一部と考えられる。両者とも



第38図 2区出土遺物 (98・99・109は1/2、それ以外は1/3)

に灰色がかった緑色の釉を施釉する。龍泉窯系青磁の可能性がある。109は砂岩製の石包丁である。背部には剥離の痕跡をとどめる。

3層出土遺物 110は須恵器の蓋である。復元口径10.0cmを測る。

客土中出土遺物

111は器種不明の弥生土器あるいは古式土師器である。外面に突帯を持つ。胎土には ϕ 0.2~0.4cm程度の混和剤が多く用いられ、器面に露出して粗雑な印象を受ける。112は土師質の土器片である。胎土が精良であり、硬質である。113は染付の椀の高台部分である。高台部内面には製の文字が見られる。

(3) 3区の調査 (第39~43図、巻頭カラー写真8、写真16)

3区においては、表土および客土の除去後に粘土層の厚い堆積が確認されたため、ある程度安定し

た堆積層に至るまで 0.45 パックホウにより掘削を行った。結果的に、調査区の西には $1.50m \times 6.0m$ (3a 区) の範囲、東側には $1.50m \times 7.5m$ (3b 区) の範囲の調査を行った。粘土層は色調や粒子の違い、混入する砂利や円礫の量によって 7 層に分層される。水分を多く含む土質で、いずれもグライ化が進んでおり、空気に触ると土色は黄色がかかった色に変色する。おおむね粘土層が水平堆積しており、上下に細長い筋状の斑駁が見られることから、沼地のような環境が想定される。3a 区の西側および 3b 区の東側において、地山が緩やかに立ち上ることが確認された。また 3a 区の東側においては 6 層がさらに深くなることから、3a 区と 3b 区の中間をおおむね谷底とするような、緩やかな谷状の地形を呈した可能性があるが、調査範囲が限定的であるため、詳細は不明である。最下層(6 層)の遺物は弥生時代中期の甕を下限とする。遺物は 4 層が最も多く、古墳時代の遺物が中心である。

【出土遺物】(第 44 ~ 47 図、写真 23)

3 区では、3a 区と 3b 区の層位に対応関係が認められる。このため、ここでは両調査区を区別せず、どちらの調査区から出土したかについては観察表に記載する。

2 層出土土器 (第 44 図 114, 115)

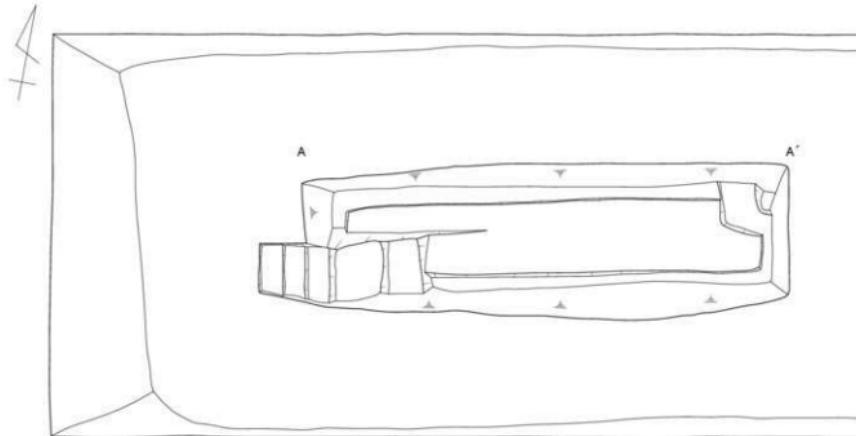
114 は土師器の小皿である。復元口径 $8.2cm$ 、復元底部径 $6.2cm$ 、器高 $1.2cm$ を測る。115 は器種不明の須恵器片である。外面には平行タタキ目を、内面はヨコナデを施す。

3 層出土土器 (第 44 図 116 ~ 122)

116 は鉗先口縁壺の口縁部片である。117 ~ 122 は布留系甕である。117 は頭部～胴部片である。肩部外面にヨコハケ、内面にケズリ調整を施す。頭部下位の内面には指頭圧痕が残る。118 は肩部～胴部片である。肩部外面にヨコハケ、下位に縦方向のハケ調整を施す。内面はケズリ調整施す。119 ~ 122 は胴部片である。119 は摩滅のため外面の調整は判然としないが、ナデによる調整とみられる。120 は外面に縦方向のハケ調整、内面にケズリ調整を施し、胴部下位の内面には指頭圧痕が残る。121 は外面にはタタキ調整のち縦方向のハケ調整を行い、内面には指頭圧痕が残る。122 は胴部下位の破片である。外器面の風化が進むが、一部ハケの痕跡が残る。内面にケズリ調整を施し、下位にはケズリ調整後の指頭圧痕が残る。

4 層出土土器 (第 44 図 123 ~ 132)

123 と 124 は甕の底部である。123 は外面の中央部分に深いくぼみをもつ。内面は器壁の剥落が進むが、中央部分に指頭圧痕が見られる。底部径 $6.9cm$ を測る。124 は平底である。外面端部から $0.8cm$ 程度内側に浅いくぼみがめぐる。復元底部径 $7.6cm$ を測る。125 は布留系甕の口縁部片である。口唇部は内傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部と胴部の境は、稜をなして明確にくびれる。外面はハケ調整のちヨコナデを施し、胴部上位にはタテハケの痕跡がみられる。内面はハケ調整のちヨコナデを行い、頭部下位には指頭圧痕が残る。柳田康雄氏の編年(1991)の IIc 式、久住猛雄氏の編年(久住 1999・2017)の III A 期と考えられる。復元口径 $20.0cm$ を測る。126 と 127 は小形丸底壺である。126 は口縁部である。口縁部はおおむね直線的に開き、端部で厚さを減じて尖る。風化が進み器面調整は不明である。口径 $11.0cm$ を測る。127 は頭部～胴部片である。内外面ともに風化が激しく判然としないが、内面には指頭圧痕が残る。橙色を呈し、胎土は精良

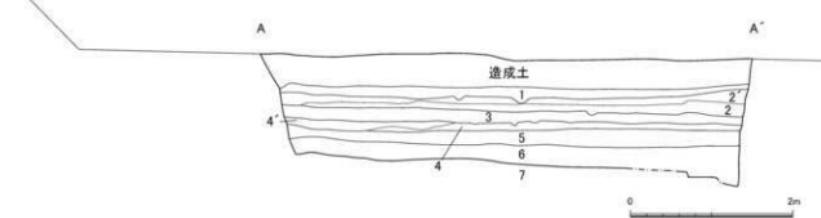


第39図 3区西側調査区平面図 (1/60)

8.000m

8.000m

地表ライン

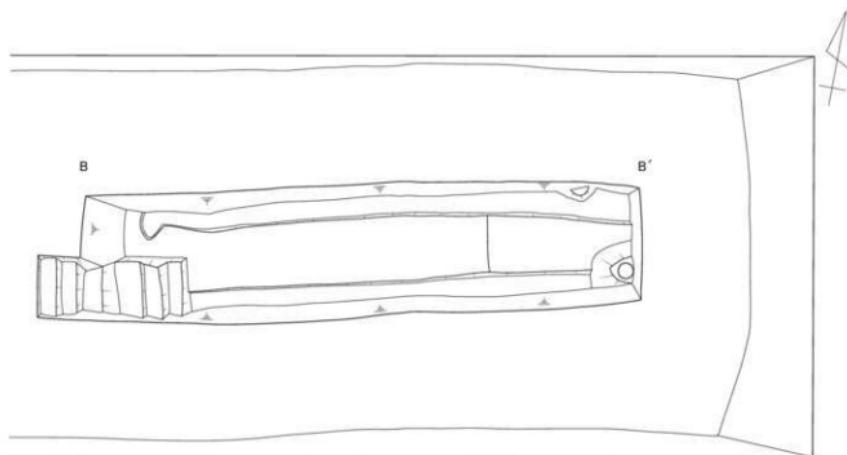


第40図 3a区北壁土層図 (1/60)

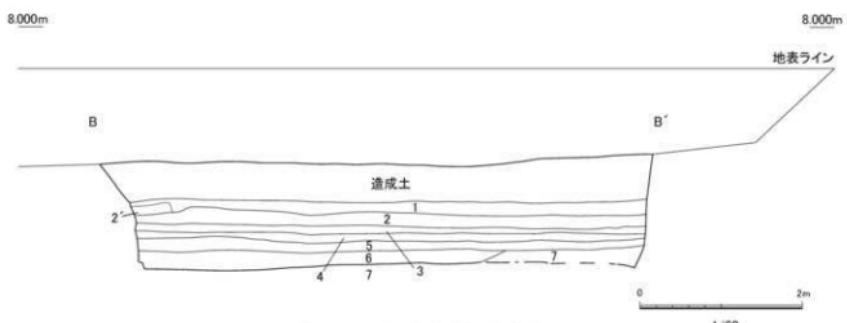
1/60

3区土層注記

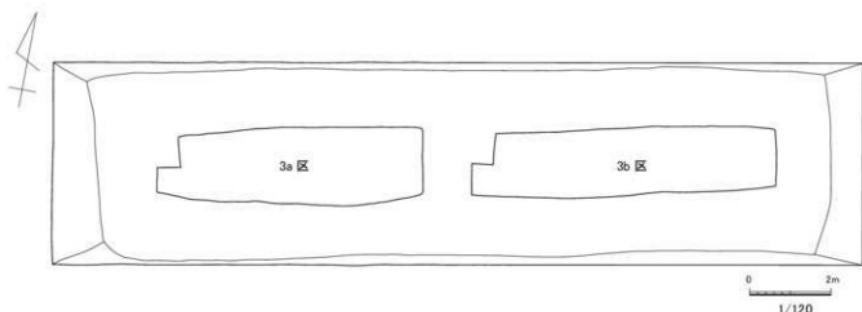
- 1 : 黒褐 (10YR3/2) 砂まじり粘質土。しまり強い。粘性やや強い。粗砂、0.5cm以下のかずれ礫多く含む。造成土の一部か。斑鉄あり。色調は10YR3/3寄り。
- 2 : 灰～黄灰 (5Y5/1-2, 5Y5/1) 粘質土 砂～粗砂大、1cm以下のくずれ礫まばらに含む。3b区はくずれ礫の混じりが多い。しまりやや強い。粘性強い。2'層部分は砂礫の混じりが2層よりやや多く、色調もやや明い。層上部に植物根と思われる縦方向のかく乱斑鉄あり。
- 3: 揭灰 (10YR4/1) 砂まじり粘質土。しまりやや強い。粘性やや強い。鉄分が結着し全体的に黄色味をおびる。粗砂大～2cm程のかずれ礫多く含む。
- 4: 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土(粘土～シルト)。粘性強い。しまりやや強い。粗砂大～1cmのかずれ礫まれに含む。4層上面～4層中に遺物多い(古墳前期か)。炭化物ごくまれに含む。4'層部分は砂質が強くなる。(微砂まじりシルト～粘土)。
- 5 : 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土。粘性強い。しまりやや強い。4層よりも砂質に寄る。極粗砂大～1cmのかずれ礫をまばらに、2～3cmの礫をまれに含む。
- 6 : 灰オリーブ (5Y5/2-5/3) 砂混じり粘質土。粘性強い。しまり強い。削ってすぐは灰色を呈するため酸化により黄色味をおびる?粗砂～極粗砂大のかずれ礫まれに含む。3c区よりも3b区の方が砂の混じりが少なく見える。地山との境界付近は色調・土質とも地山に近い漸移層がある。
- 7 : 地山 黄色 (5Y7/6) 粘質土。粘性。しまり強い。削ってすぐは灰白 (5G8Y/1) に近い。酸化して黄色を呈するものと考えられる。黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土ブロックがまばらに入る。植物根等の影響か?



第41図 3区東側調査区平面図 (1/60)



第42図 3b区北壁土層図 (1/60)



第43図 3区内調査区位置図 (1/120)

である。128～132は高杯である。128～131は壺部である。128は直線的に立ち上がる。129は口唇部がやや外反して立ち上がる。復元口径17.0cmを測る。130は壺部がかなり浅く、口縁部がやや外反して緩やかに立ち上がる。復元口径は18.6cmを測る。131は壺部の屈曲部分である。輪郭の不鮮明な突出がめぐる。132は脚部である。混和材を多く含み胎土はあまり精良でなく粗雑な印象を受ける。器面の風化が進み器面調整は明瞭でない。復元底部径は13.0cmを測る。

4層出土石器（第44図133）

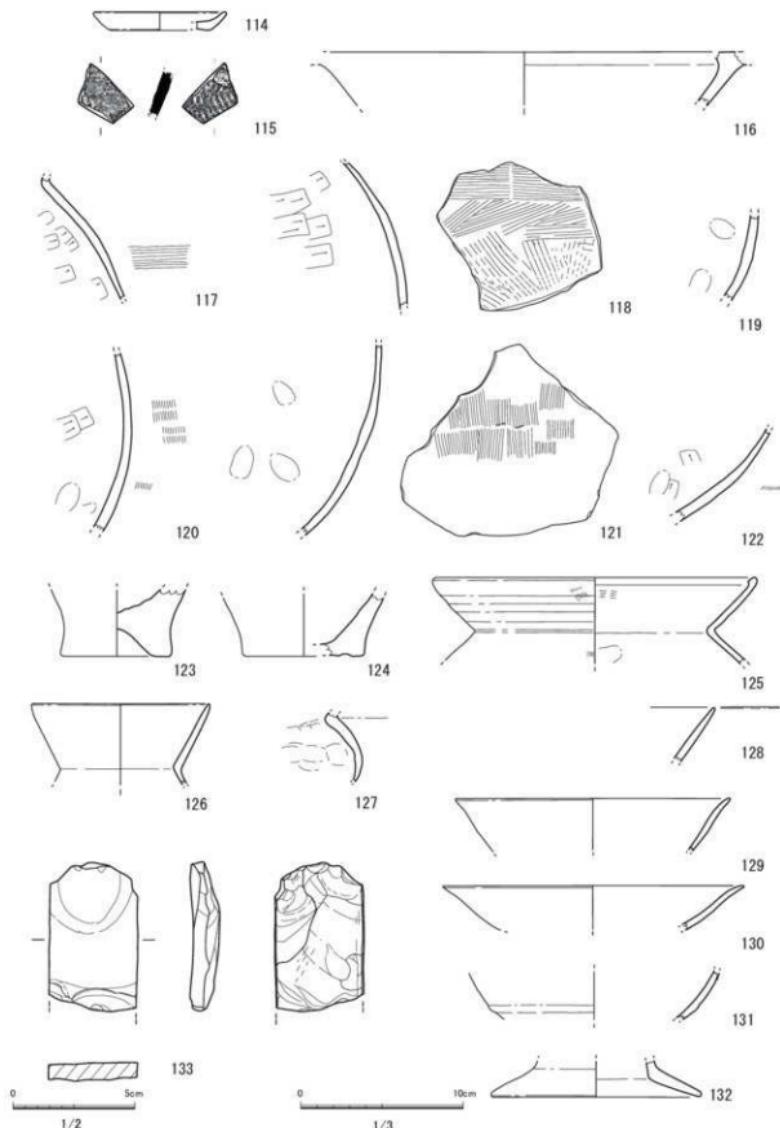
133は層灰岩製の扁平片刃石斧の未成品である。腹面には連続剥離によるリング状の凹凸を残し、背面には打点の周辺に剥離が見られる。打面調整の可能性がある。刃部側で破断したため廃棄に至ったものと想定される。長さ6.0cm、幅3.9cm、最大厚0.7cmを測る。

5層出土土器（第45図134～161）

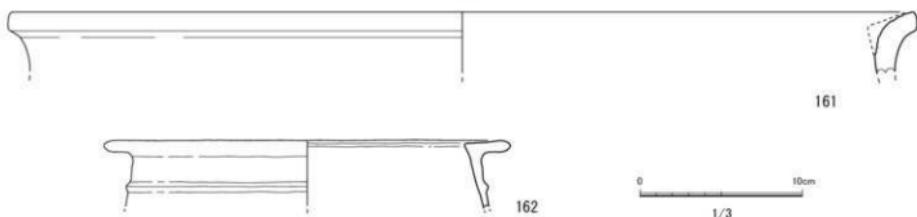
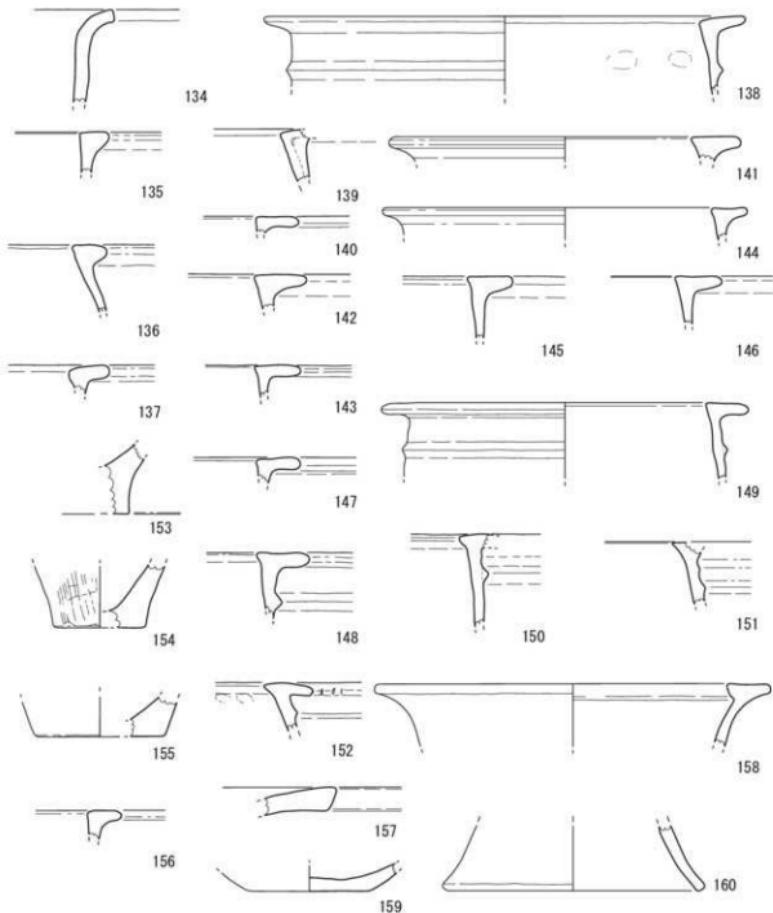
134～156は壺である。134～152は壺の口縁部である。134は口縁部が外反するものである。器面調整は不明である。混和材を多く含み、内器面がザラザラしている。135は口縁端部が断面三角形を呈す。136は口縁端部が断面「コ」字形を呈す。胴部が大きく張り口径が小さくすぼまる。137～147は口縁端部が断面「L」字形を呈す。137～139は口縁部上面が内側に傾く。138は外端部の突出がやや大きい。139は粘土の接合痕が明瞭に見られる。140～145は上面がほぼ平坦なものである。144、145、146、147は内面端部を弱くつまみやや突出する。144、146はヨコナデによつて上面がわずかにくぼむ。147は外面突出が弱いがいわゆる鋤先口縁に近い形状である。148～152は内・外面端部が突出するいわゆる鋤先口縁である。148、149はヨコナデにより上面がややくぼむ。149は口縁部外面に対するヨコナデと突帯に対するヨコナデにより、口縁部と突帯の中間が弱く隆起する。150と151は外面口縁端部を欠損するが、内面端部が強く突出することから、鋤先形口縁であると考えられる。両者ともに口縁部外面に対するヨコナデと突帯に対するヨコナデにより、口縁部と突帯の中間が隆起する。151は強く隆起し、2条の突帯を張り付けたように見える。152は外面端部が垂れ下がるものである。外面端部には弱い刻目を施し、内面端部には突出部を作出する際のユビオサエの痕跡を明瞭に残す。153～155は壺の底部である。153は分厚い底部である。破片であるため詳細は不明である。154は薄い平底の底部である。外面にはハケメ調整を施す。復元底部径5.8cmを測る。155は小片であるため詳細が分からぬが、壺等の底部の可能性も残る。156は外面端部の突出が小さい。小形の壺の可能性がある。157、158は壺の口縁部である。157は素口縁の広口壺の端部である。158は鋤先口縁壺である。内面端部に強いヨコナデを施し、上面がややくぼむ。復元口径24.3cmを測る。159は壺の底部である。胴部に向かって緩やかに立ち上がる。復元底部径9.5cmを測る。160は高壺の脚部である。風化が進み器面調整は不明である。161は壺棺の口縁部である。内面が粘土の接合に沿って剥落するが、おおよそ断面「コ」字状、あるいは「L」字状を呈するものと考えられる。外面にはナデを施す。残存率が低いためや不安定であるが、復元口径は56.0cmを測る。壺棺編年の城ノ越式（中期初頭；橋口達也氏の編年によるK II a式（橋口達也2005））のものであると考えられる。

5層出土石器（第46図163～168）

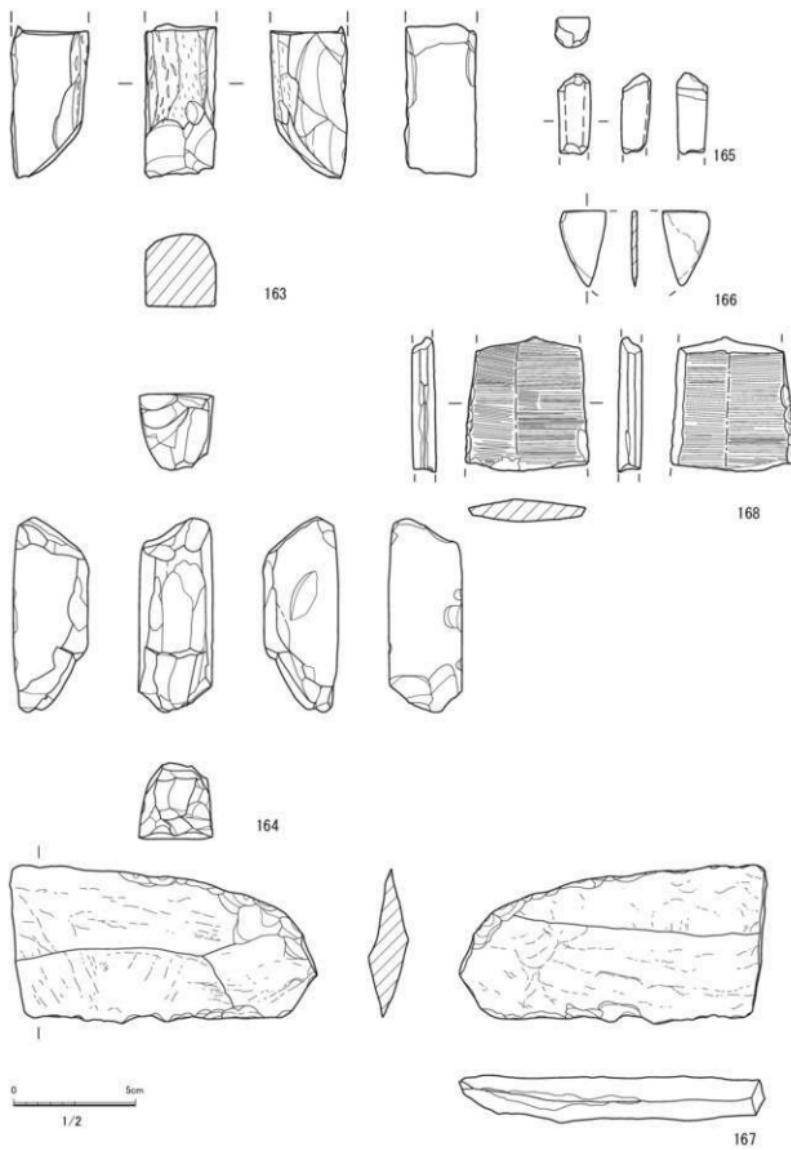
163と164は整形石斧である。163は層灰岩製の未成品で、右側面には薬理面を残し、左側面には前正面からの剥離が見られる。刃部も前正面からの剥離によりある程度作出されている。後主



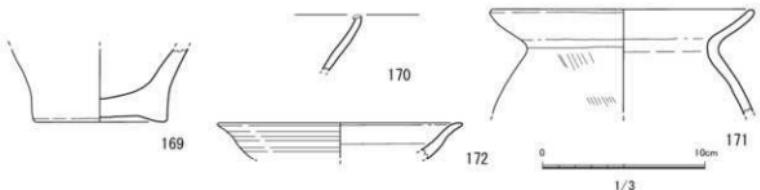
第44図 3区2～4層出土遺物 (133は1/2、それ以外は1/3)



第45図 3区5・6層出土遺物 (1/3)



第 46 図 3 区 5 層出土遺物 (1/2)



第47図 3区その他の出土遺物 (1/3)

面には敲打が見られるが、右側面寄りには粗い敲打痕が、左側面寄りには細かな敲打痕が見られる。基部側が破断していることから、敲打の途中で、基部側が破断したため廃棄に至ったものと推測される。残存長5.5cm、幅2.5cm、厚さ2.6cmを測る。**164**は砂岩製で、前主面を入念に研磨し、左右側面も成形に必要な研磨が施されている。また基部側は右側面側の一部が打撃により欠損している。このことから、成品として使用されたものと判断されるが、刃部側には主に前主面側からの打撃による剥離が繰り返され、刃部先端から2cm程度の所で折れて後主面との間に0.5cm程度の段差を生じている。以上から、本例は刃部の再生を試みたものの、刃部側の剥離によって前背面と後背面と厚みをうまく減じることができず、また基部から刃部までの全長も短くなりすぎたことから廃棄に至ったものと推測される。**165**は層灰岩製の彫形石斧である。前主面、後主面および両側面を磨き、精巧である。刃部を欠損する。残存長3.2cm、幅1.3cm、厚さ1.2cmを測る。**166**は砂岩製の石包丁である。**167**は玄武岩製の石鎌である。断面菱形を呈す。基部には両面からの加工痕が見られ、刃部には刃こぼれが見られる。**168**は磨製石剣である。鎌を中心にして刃身に対しヨコあるいはナナメ方向に磨きが施される。鎌は湾曲しており、刃部は砥ぎ合わされていない。一方、刃部には使用による刃こぼれと考えられる剥落が見られる。残存長5.1cm、幅4.4cm、厚さ0.8cmを測る。

6層出土土器 (第45図 162)

調査の過程（掘削時）では、5層と6層は分層できず、掘削後2層に分層されたという経緯がある。そうした中で、6層より出土したことが確実な資料があるので、6層出土として報告する。**162**は鷲先形口縁をもつ甕の口縁部である。内面端部へのヨコナデにより、上面がややくぼむ。外面端部下の一部にススが付着する。復元口径25.0cmを測る。

その他の出土遺物 (第47図)

169～172は3区の調査区清掃中、廃土中出土遺物である。**169**は弥生土器の甕の底部である。ほぼ平底であるが底部がいくぶんか持ち上がる。風化が進み器面調整は不明である。底部径8.2cmを測る。**170**、**171**は布留系甕の口縁部片である。**170**は口唇部を欠損するが内傾するものと判断される。口縁部は内湾気味に立ち上がる。**171**は口唇部が外傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。頸部と胴部の境の屈曲はやや弱く明瞭な稜をなさない。風化が進み、内面・外面ともに器面調整がよく観察されないが、内面の屈曲部、および頸部下位には指頭圧痕が残る。柳田康雄氏の編年(1991)のIIc式、久住猛雄氏の編年(久住1999・2017)のIII A期と考えられる。復元口径16.2cmを測る。**172**は肥前系陶器の甕の口縁部であると思われる。口唇部がやや外反する。内面

には一条の沈線を持つ。内外面に灰釉を施釉する。釉薬には気泡が多く見られ発色はあまりよくない。素地はにぶい橙色を呈し均質である。

引用・参考文献

- 壱岐市教育委員会 2021『原の辻遺跡・小場遺跡』壱岐市文化財調査報告書第31集
- 小田富士夫 2021「国史跡「壱岐古墳群」と「壱岐島造」」『古文化談叢』第87集小田富士夫先生米寿記念論文集
- 河合恭典 2021「官道をゆく～古代律令制度下における壱岐国の体制～」『古代世界の中の壱岐』壱岐市教育委員会
- 川道寛 2014「旧石器時代～縄文時代早期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号
- 川道寛・片多雅樹・辻田直人 2017「長崎県における黒曜石産地研究の進展～原の辻遺跡原ノ久保地区石器群の分析を通して」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 長崎県埋蔵文化財センター
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『第19回九州前方後円墳研究会長崎大会・発表要旨集・基本資料集：九州における古式古器』九州前方後円墳研究会
- 白石渓汎 2021「原の辻遺跡芦辺高原地区出土 馬形青銅製品について」『令和3年度東アジア国際シンポジウム光り輝く青銅器を求めて—原の辻遺跡出土青銅器から見た東アジア交流—』長崎県埋蔵文化財センター
- 長崎県教育委員会 1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
- 長崎県教育委員会 1999『闇縫遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集
- 長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡総集編I』原の辻遺跡調査事務所報告書第30集
- 長崎県教育委員会 2006『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第34集
- 長崎県教育委員会 2009『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集
- 長崎県教育委員会 2010『長崎県中世城館跡分布調査報告書I』長崎県文化財調査報告書第206集
- 長崎県教育委員会 2013『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第9集
- 長崎県教育委員会 2015『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 長崎県教育委員会 2021『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第37集
- 橋口達也 2005『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣
- 古澤義久・片多雅樹 2017「原の辻遺跡出土庄東系銅鏡について」『九州考古学』第92号
- 古澤義久・田中聰一 2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号
- 宮崎貴夫 2008『原の辻遺跡・壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社
- 宮本一夫編 2013『カラカミ遺跡IV』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編 2018『壱岐原の辻闇縫遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 森貴教 2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学出版会
- 柳田康雄 1991「2.九州」『古墳時代の研究6：土師器と須恵器』雄山閣

第3-1表 土器・陶磁器観察表（1区）

No.	調査区	造形・形態	器種	部位	時期・式	法量 (cm)	色調(外側)		色調(内面)		施土	調整(外側)	調整(内面)	備考	
							色 Hue	色 Hue	色 Hue	色 Hue					
1	1a区	洗路1-層	すり鉢	網	～17c前半	—	浅黄	2.5YR7/3	にぶい黄	7.5YR6/4	長石・石英・當母	板ナデ	幅目	幅目8本1単位	
2	1a区	洗路2-1層	高杯	脚	不明	横(3.4)	黄青	10YR8/3	にぶい黄	2.5YR7/3	石英・當母	ナデか	ナデか	摩滅が進む	
3	1a区	洗路2-1層	不明	網	不明	—	灰	10YR6/1	にぶい黄	10YR7/4	長石・石英	不明	不明	東洋系土器か	
4	1a区	洗路2-1層	須恵器・舟形片	底(10.2)	灰白	N7/0	灰	N8/0	長石・石英	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	
5	1a区	洗路2-1層	鋤鉢	網	～17c前半	—	灰	N6/0	黄灰	586/1	長石・石英・當母	回転ナデ	回転ナデ	—	
6	1a区	洗路4-層	束縛罐	底(0.7)	重(0.0)	にぶい黄	10YR6/4	洗路4-層	10YR6/2	長石・石英・當母	ハケメ	ナデ	—	—	
7	1a区	洗路5-1層	甌	口縁部破片	城/越	—	にぶい黄	10YR7/3	灰白	SYT7/1	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデか	—	
8	1a区	洗路5-1層	甌	口縁部破片	洗灰I	—	壁	SYR6/6	にぶい黄	10YR6/3	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
9	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	—	にぶい赤茶	SYR5/4	明赤褐	SYR5/6	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
10	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	口(35.0)	壁	7.5YR6/4	にぶい黄	SYR6/4	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
11	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	口(26.6)	底灰黄	2.5YR5/2	灰黄	7.5YR6/2	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	摩滅が進む	
12	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	口(30.7)	壁	2.5YR6/6	にぶい黄	SYR6/4	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデか	—	
13	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	口(25.0)	明赤褐	SYR5/6	にぶい黄	10YR6/3	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
14	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古(26.7)	壁	7.5YR6/3	にぶい黄	SYR6/4	長石・石英・砂粒	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ユビオサエ	
15	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	新(25.0)	にぶい黄	7.5YR5/4	明赤褐	SYR5/6	長石・石英・dmm程度の大粒 の粒子が目立つ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
16	1a区	洗路5-1層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古(6.6)	壁	SYR7/6	にぶい黄	10YR7/3	長石・石英・當母	不明	ヨビオサエ	摩滅が進む	
17	1a区	洗路5-1層	甌	底部片	洗灰I	吉(26.7)	底灰	2.5YR7/3	灰黄	2.5YR6/2	長石・石英・砂粒	不明	不明	摩滅が進む	
18	1a区	洗路5-1層	台付罐	中周(1.2)	洗灰I	古(9.4)	壁	7.5YR6/6	明赤褐	SYR5/6	長石・石英・當母	ハケメ	ナデか	—	
19	1a区	洗路5-1層	陶先口縁蓋	縁	洗灰I	—	底灰	2.5YR5/1	にぶい黄	7.5YR7/6	長石・石英・當母	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
20	1a区	洗路5-1層	陶先口縁蓋	縁	洗灰I	新(26.7)	壁	SYR6/6	明赤褐	SYR5/6	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ゆがみが大きい	
21	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	板付II	—	黑褐	10YR3/2	灰黄	10YR4/2	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	口唇剥離	
22	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	板付II	—	灰黄褐	10YR5/2	灰黄	10YR6/2	長石・石英	ナデか	不明	弱い洗線	
23	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	板付II	口(32.4)	にぶい黄	10YR7/3	にぶい黄	10YR7/2	長石・石英・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
24	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	板付II	—	にぶい黄	7.5YR7/4	にぶい黄	7.5YR7/4	長石・石英・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
25	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	城/越	口(21.0)	壁	SYR6/6	にぶい黄	7.5YR6/4	長石・石英・當母	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	—	
26	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	城/越	口(26.6)	壁	2.5YR6/6	にぶい黄	7.5YR5/3	長石・石英・當母	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	—	
27	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古	—	にぶい黄	7.5YR5/4	明赤褐	SYR5/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	—
28	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古(26.7)	明赤褐	SYR5/6	明赤褐	SYR6/6	長石・石英・當母	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
29	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	吉(26.3)	にぶい黄	10YR7/3	にぶい黄	10YR6/3	長石・石英・角閃石	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	—	
30	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古(28.0)	にぶい黄	10YR7/4	にぶい黄	10YR7/2	長石・石英・當母	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	—	
31	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古	—	美黄	2.5YR5/3	黄褐	2.5YR5/3	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨビオサエ
32	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	古	—	にぶい黄	10YR6/3	にぶい黄	10YR5/3	長石・石英・當母	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	—
33	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	吉	口(25.2)	明褐	7.5YR6/6	壁	2.5YR6/6	長石・石英・當母	ヨコナデ	ヨコナデ	—
34	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	新(23.1)	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄	10YR4/3	長石・石英・當母	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
35	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	—	にぶい黄	10YR5/3	黑褐	2.5YR5/1	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
36	1a区	洗路5層	甌	脚(1.6)	洗灰I	口(22.4)	明赤褐	SYR5/6	壁	SYR6/6	長石・石英・當母	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	—	
37	1a区	洗路5層	甌	底部片	城/越	底(7.0)	明赤褐	SYR5/6	にぶい黄	7.5YR5/3	長石・石英・當母	ナデ	ナデ	ユビオサエ	
38	1a区	洗路5層	甌	底部片	城/越	底(6.4)	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい黄	7.5YR5/4	長石・石英・當母	ハケメのち	ナデ	不明	
39	1a区	洗路5層	甌	底部片	城/越	—	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・當母	不明	不明	摩滅が進む	
40	1a区	洗路5層	甌	底部片	城/越	底(7.2)	にぶい黄	10YR5/3	にぶい黄	7.5YR5/4	長石・石英	ハケメのちナデ	ナデ	ユビオサエ	
41	1a区	洗路5層	甌	底部片	城/越	底(6.1)	明赤褐	2.5YR5/6	壁	SYR6/6	長石・石英・角閃石	不明	不明	摩滅が進む	
42	1a区	洗路5層	甌	底部片	洗灰I	吉(6.3)	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい黄	10YR5/3	長石・石英	不明	不明	摩滅が進む	
43	1a区	洗路5層	甌	底部片	洗灰I	底(6.8)	にぶい赤茶	SYR5/4	黑褐	SYR2/1	長石・石英	ハケメ	ナデ	ユビオサエ	
44	1a区	洗路5層	甌	脚	板付II	—	壁	10YR5/1	壁	2.5YR6/6	長石・石英・當母	ヨコナデ・ナデ	ナデ	黒文2絆の羽状文	
45	1a区	洗路5層	甌	脚	口(19.4)	にぶい黄	10YR7/3	黑褐	2.5YR5/1	にぶい黄	10YR7/2	長石・石英・當母	ヨコナデ	ハケメか・ナデか	瓶部に沈緑
46	1a区	洗路5層	陶先口縁蓋	口縁	洗灰I	—	壁	7.5YR6/6	にぶい黄	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ナデか	—	

No	調査区	造構・部位	器種	部位	時期・式型	法量	色調(外面)		胎土	調整(外面)	調整(内面)	備考	
							色	Hue					
60	I区	SD06	甕	底	不明	底(5.6)	明赤褐	5YR5/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英 褐色粒子	不明	ユビオサエ のうな子
62	I区	SD07	壺or鉢	口縁	直吹Ⅰ	—	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ・ハケメ	不明 内面剥落
63	I区	SD07	壺or鉢	口縁	直吹Ⅰ	—	にぶい黄褐	7.5YR6/4	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英 當身	ヨコナデ	ナデ
64	I区	SD07	壺or鉢	口縁	直吹Ⅱ	—	橙	7.5YR6/6	にぶい黄褐	9YR7/3	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヨコナデか 摩滅が進む
65	I区	SD07	壺or鉢	口縁	直吹Ⅲ?	—	にぶい黄褐	7.5YR5/2	にぶい黄褐	7.5YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	不明
66	I区	SD08	甕	口縁	直吹Ⅳ?	(17.8)	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	金雲母が多い
68	I区	SD05	壺or鉢	口縁	直吹Ⅴ?	—	橙	7.5YR6/6	にぶい黄褐	2.5YR6/6	長石・石英・當身	ヨコナデ	摩滅が進む
69	I区	SD05	甕	口縁	直吹Ⅵ?	—	にぶい黄褐	7.5YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/4	長石・石英・當身	ヨコナデ	ナデ
70	I区	4層	弥生甕or鉢	口縁	直吹Ⅶ?	—	にぶい黄褐	7.5YR6/4	白	7.5YR6/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ
71	II区	4層	弥生甕or鉢	口縁	直吹Ⅷ?	—	黄反	2.5YR4/6	明赤褐	10YR6/4	長石・石英・當身	ヨコナデ	ナデか
72	II区	4層	弥生甕or鉢	口縁	直吹Ⅸ?	—	赤棕	10YR6/6	にぶい黄褐	5YR7/4	長石・石英	ヨコナデ	不明
73	II区	4層	甕	口縁	直良~平安	口(24)	灰褐	2.5YR4/2	にぶい黄褐	7.5YR5/4	長石・石英 褐色粒子	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ ヘアゲリ
75	I区	旧耕作土	三輪系瓦質土器	網鉢	不明	—	浅黄	2.5Y7/4	灰黄	2.5Y7/4	細密、微細唇母片	格子タキ	ナデ

第3-2表 土器・陶磁器観察表(2区)

No	調査区	造構・部位	器種	部位	時期・式型	法量 (cm)	色調(外面)		胎土	調整(外面)	調整(内面)	備考		
							色	Hue						
76	II区	SB02	底面	甕	口縁~底	直吹Ⅰ古	口(19.8) 高22 幅17.6 底10	10YR6/2 7.5YR6/6 7.5YR6/6	にぶい黄褐	10YR7/2	長石・石英 角閃石	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデか ・ユビオサエ	
77	II区	SB02	甕	口縁	直吹Ⅰ新	口(19.4)	標準	7.5YR7/6	青	7.5YR6/7	長石・石英・金雲母 角閃石	ヨコナデ ・ハケメ	ナデか ・ユビオサエ	
78	II区	SB02	蓋杯	口縁	直吹Ⅰ新?	—	にぶい黄褐	10YR7/4 5YR6/6	青	SYR6/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
79	II区	SB02	小形土器	底	不明	底(3.4)	黄反	2.5Y5/3	にぶい黄褐	10YR7/3	極めて綠	横方向の強い 工具痕	燒成非常に良好	
82	II区	SB03	甕	口縁	底/越	—	褐色	10YR1/1	灰褐	10YR4/1	長石・石英	ナデか	口唇部に斜目	
83	II区	SB03	無蓋器or小形土器	口縁	直吹Ⅰ新?	—	にぶい黄褐	7.5YR5/3	底褐	7.5YR5/2	長石・石英・金雲母	ヨコナデ	ヨコナデ	
84	II区	SKD1	甕	口縁~底	直吹Ⅰ新	口(19.0) 残高(13.9) 幅(16.7)	にぶい黄褐	10YR7/4	灰白	10YR8/1	長石・石英・金雲母	ヨコナデ・ナデか ・ユビオサエ	ヨコナデ・ナデか ・ユビオサエ	
85	II区	SD02	弥生甕	口縁	底/越	—	直吹褐	10YR6/2	青	2.5Y7/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
86	II区	SD02	弥生甕	口縁	直吹Ⅰ	—	にぶい黄褐	SYR7/3	にぶい黄褐	5YR6/4	長石・石英	不明	摩滅が進む	
87	II区	SD02	弥生甕	口縁	直吹Ⅱ?	—	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい赤褐	2.5YR6/4	長石・石英	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデか	
88	II区	SD02	須恵器	不明确	—	灰	NB-0	灰	NB-0	NB-0	長石・雲母	カキメ	同心円当真底	
89	II区	SK01	甕	口縁	直吹Ⅰ新	—	にぶい黄褐	SYR6/6	黑褐	SYR6/3	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
90	II区	SK01	甕	口縁	直吹Ⅰ	(2.6)	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄褐	10YR6/3	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
91	II区	SK01	甕	底	—	にぶい黄褐	7.5YR7/3	にぶい黄褐	SYR6/4	長石・石英	ナデか	不明		
92	II区	SK01	甕	底	直吹	底7.0	橙	2.5YR6/6	灰赤	2.5YR4/1	長石・石英	ナデか	不明	
93	II区	SK01	甕	底	直吹Ⅰ新、II底(8.0)	—	にぶい黄褐	2.5YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英・當身	ナデか	ナデか	
94	II区	SP01	甕	口縁	直吹Ⅱ?	—	にぶい黄褐	7.5YR7/3	にぶい黄褐	7.5YR7/3	長石・石英・當身	不明	ヨコナデ・ナデか	
96	II区	現代 カクラン窯	焼付	網	網	10e?	—	鐵黃	2.5Y7/2 506/1	網	10YR8/4 鐵黃	焼付	焼付	津州窯系か
97	II区	1層	磁器の碗	高台	碗?	底(7.4)	明赤褐	10YR7/1	明赤褐	2.5Y5/2 2.5Y5/6	精良	底部下半露胎	蛇目釉剥げ	
100	II区	2~1層	磁器の碗	高台	碗?	底(3.1)	青オリーブ	5YR7/2	にぶい黄褐	9Y6/2 9Y7/4	やや褐色	外側泡胎	見込み難 難解剖成員見出	
101	II区	2~2層	青色土器	口縁	10~11e	—	オリーブ青	7.5Y3/2	オリーブ青	7.5Y3/2	石英・當身	ナデか	ナデか	
102	II区	2~3層	三輪系	不明确	—	淡黄	2.5Y7/4	淡黄	2.5Y7/4	長石・當身	格子タキ	ナデ		
103	II区	2~3層	三輪系	不明确	—	淡黄	9Y8/2	底白	SYR8/2	長石・石英	格子タキ	ナデ		
104	II区	2~3層	土師質土器片	不明确	—	にぶい黄褐	10YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/3	石英・褐色粒子	不明	不明	硬質である	
105	II区	2~3層	淡黄容器	網	不明确	—	灰	9Y8/1	灰	NB-0	長石・當身	平行タキ	格子目当真底	
106	II区	2~3層	淡黄容器	網	不明确~平安	—	2.5Y5/1	底白	N7/0	長石・石英	回転ナデ	回転ナデ	薄く自然釉	
107	II区	2~3層	青磁	底	12.13c?	—	灰オリーブ	5Y6/2	灰オリーブ	5Y6/2	5Y6/1・灰	施文・施跡	施文・施跡	難泉窯系か
108	II区	2~3層	青磁	網	12e?	—	オリーブ灰	2.5Y9/1	オリーブ灰	2.5Y9/1	灰7Y7/1灰白	施文・施跡	施文・施跡	難泉窯系か
110	II区	3層	淡黄容器	蓋	7e	口(10e)	底白	N7/0	底白	NB-0	長石・石英・當身	回転ナデ	回転ナデ	
111	II区	3層	土師質土器or古式土器	口縁	不明确	—	灰白	2.5Y8/1	淡黄褐	10YR7/4	石英・褐色粒子	不明	不明	
112	II区	3層	土師質土器片	不明确	不明确	—	にぶい黄褐	10YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/4	石英・褐色粒子	不明	不明	硬質である
113	II区	3層	土師	付付柄	高台	10e前半	オリーブ灰	2.5Y9/1	底白	5G9/8/1	灰7Y7/1灰白	施跡・焼付	施跡・焼付	皮に裂の文字

第3-3表 土器・陶磁器観察表（3区）

No	調査区	遺構・層位	器種	部位	時期・式型	法量	色調(外面)		色調(内面)		施土	調整(外面)	調整(内面)	備考
							色 Hue	色 Hue	色 Hue	色 Hue				
114	3a区	2層	甕	口縁～底	不明	□(8.2)	浅黄褐	10YR8/2	にぶい黄褐	10YR7/4	長石・褐色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ	
115	3a区	2層	甕	甕	不明	一	灰	5YR1/1	灰白	N7/	長石・石英	平行タキ	ナデ	
116	3a区	3層	甕	口縁	遺状Ⅱ?	—	にぶい黄褐	10YR7/3	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・霞母	ヨコナデ	ヨコナデ	
117	3a区	3層	甕(古式土器部)	甕～瓶	古墳前期	—	緑	5YR8/8	灰	10YR8/1	長石・石英・霞母 ・赤色粒子	ヨコハケ・ナデ	テラ・ビオサ エ・ケズリ	
118	3b区	3層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	—	緑	5YR8/6	灰白	25YR1/1	長石・石英	ヨコハケ・ハメ	ケズリ	
119	3b区	3層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	—	緑	5YR8/6	緑	75YR4/1	長石・石英	ナデ	ビオサエ	
120	3a区	3層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	—	赤	10R8/6	暗赤	10R3/1	長石・石英	ハメのちナデ	タラ・ビオサ エ・ケズリ	
121	3a区	3層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	—	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄褐	10YR7/2	長石・石英	タラ・ビオサ エ・ケズリ	ビオサエ	
122	3b区	3層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	—	赤	10R5/6	黒	25YR2/1	長石・石英・霞母	ナメのち ナデ	タラ・ビオサ エ・ケズリ	
123	3b区	4層	甕(古式土器部)	甕	城/罐	遺(6.9)	緑	5YR8/8	灰白	10YR7/1	長石・石英	ナデ	不明	内面剥落
124	3a区	4層	甕(古式土器部)	甕	遺状Ⅰ新～ 窓(7.6)	緑	5YR8/6	灰白	10YR6/1	5YR4/4	長石・石英	不明	ナデ	
125	3a区	4層	甕(古式土器部)	甕	古墳前期	□(20.0)	にぶい黄褐	10YR7/4	灰白	10YR8/1	長石・石英 ・赤色粒子	ヨコナデ	タラ・ビオサ エ・ケズリ	
126	3a区	4層	小型丸底盆 (古式土器部)	口縁	古墳前期	□(1.0)	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
127	3b区	4層	小型丸底盆 (古式土器部)	甕～瓶	不明	—	緑	5YR7/6	緑	75YR7/6	長石・石英	不明	ビオサエ	
128	3b区	4層	杯部	古墳前期	—	灰白	10YR7/1	浅黄	10YR8/3	石英・長石 ・赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ		
129	3b区	4層	杯部	古墳前期	□(17.0)	緑	2.5YR6/6	緑	5YR8/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
130	3b区	4層	杯部	古墳前期	□(18.6)	緑	5YR6/6	緑	5YR7/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
131	3b区	4層	高杯	杆部	古墳前期	—	緑	2.5YR8/6	淡黄	10YR8/4	長石・石英	ナデ	ヨコナデ	
132	3b区	4層	高杯	脚	古墳前期	遺(13.0)	浅黄	2.5YR8/4	灰黄	25YR2/1	長石・石英	不明	不明	摩滅が進む
134	3a区	5層	甕	口縁	板付Ⅲ新か	—	にぶい黄褐	10YR6/4	灰白	10YR4/1	長石・石英	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	
135	3a区	5層	甕	口縁	城/罐	—	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄褐	10YR7/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
136	3a区	5層	甕	口縁	城/罐	—	灰黄	2.5YR7/2	灰黄	2.5YR7/2	長石・石英・霞母	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
137	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ古か	—	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・角閃石	不明	不明	摩滅が進む
138	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ古	□(29.5)	明赤褐	10YR7/2	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ユビオ エ・ナデ	
139	3b区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ古か	—	にぶい黄褐	10YR5/4	明赤	75YR5/6	長石・石英	不明	ヨコナデ	
140	3b区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	—	明赤	7.5YR5/6	明赤	75YR5/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
141	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	□(21.6)	赤	10R5/6	暗赤	25YR5/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
142	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	—	にぶい黄褐	10YR7/3	灰	10YR6/1	長石・石英・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ	
143	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ古か	—	にぶい黄褐	10YR6/4	灰白	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
144	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	□(22.4)	緑	5YR6/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
145	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	—	墨褐	2.5YR3/1	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・角閃石	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
146	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ新か	—	にぶい黄褐	10YR6/4	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
147	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ古か	—	にぶい黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR5/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
148	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅱ	—	にぶい緑	7.5YR6/4	にぶい緑	75YR7/4	長石・石英 ・褐色色土	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
149	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅲ	□(22.3)	灰褐	10YR4/2	灰白	10YR6/6	長石・石英・霞母	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
150	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅲか	—	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
151	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅱか	—	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい黄褐	10YR7/3	長石・石英・霞母	ヨコナデ	ナデ	
152	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅱ	—	緑	5YR6/6	にぶい黄褐	5YR4/2	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ユビオ エ・ナデ	口唇部に削目
153	3a区	5層	甕	底部	遺狀Ⅰか	—	明赤褐	2.5YR5/8	灰	2.5YR6/8	長石・石英・霞母	不明	不明	
154	3a区	5層	甕	底部	遺狀Ⅰ新か	—	明赤褐	2.5YR5/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英	ハメ	ナデ	
155	3b区	5層	甕	底部	不明	遺(5.0)	明赤褐	5YR5/6	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英	不明	不明	
156	3b区	5層	小型甕	口縁	遺狀Ⅰか	—	にぶい黄褐	10YR6/4	明赤褐	10YR6/5	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	摩滅が進む
157	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ、II	—	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/4	長石・石英・霞母	ヨコナデ	ヨコナデ	
158	3a区	5層	甕	口縁	遺狀Ⅰ	□(24.4)	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ	
159	3a区	5層	甕	底	不明	遺(7.5)	黒	7.5YR2/1	灰白	7.5YR7/6	長石・石英	ナデ	不明	
160	3a区	5層	甕	底	不明	遺(6.1)	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄褐	5YR4/4	長石・石英	不明	不明	
161	3a区	5層	甕	口縁	K II A式	□(56.0)	にぶい黄褐	10YR7/3	にぶい黄褐	10YR7/3	長石・石英	ヨコナデ	ナデ	
162	3a区	6層	甕	口縁	遺狀Ⅱ	□(25.0)	にぶい黄褐	7.5YR6/4	緑	7.5YR6/4	長石・石英・霞母 ・赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ	
163	3b区	6層	甕	口縁	遺(6.1)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	不明	不明		
164	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
165	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
166	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
167	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
168	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
169	3b区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
170	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
171	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		
172	3a区	6層	甕	口縁	遺(5.0)	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR6/4	長石・石英	ヨコナデ	ヨコナデ		

第4表 石器観察表

番号	調査区	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
47	1区	流路2-1・2-2層	砥石再加工品	6.4	2.3	1.7	47.83	砂岩
48	1区	流路2-1・2-2層	不明石製品	4.0	3.0	2.5	28.82	層灰岩
49	1区	流路4層	整形石器(未成品)	6.9	1.6	1.5	38.44	層灰岩
50	1区	流路4層	石器素材	5.5	5.4	2.4	84.32	層灰岩
51	1区	流路4層	剥片	3.8	3.1	0.8	10.55	黒曜石(漆黒色)
52	1区	流路5-1層	整形(-扁平片刃)石斧の一部	6.85	1.45	1.45	20.0	層灰岩
53	1区	流路5-1層	整形石斧(未完成)	8.1	2.9	2.9	138.74	基灰岩か
54	1区	流路5-1層	石鍬	7.7	6.0	0.9	84.05	玄武岩
55	1区	流路5-1層	石核(素材)	5.9	4.9	4.0	130.19	黒曜石(漆黒色)
56	1区	流路5層(5-2～5-5層)	扁平方刃石斧	7.5	3.4	1.0	46.33	層灰岩
57	1区	流路5層(5-2～5-5層)	整形(-扁平片刃)石斧の一部	4.0	0.9	0.5	3.13	層灰岩
58	1区	流路5層(5-2～5-5層)	磨製石劍	4.4	4.2	0.8	21.67	頁岩
59	1区	流路5層(5-2～5-5層)	剥片	8.6	5.0	1.1	42.22	黒曜石(漆黒色)
61	1区	SD06	石鍬	5.5	3.8	0.5	23.3	砂岩
67	1区	SD04	整形石斧	5.7	1.8	2.3	41.75	層灰岩
74	1区	遺物包含層	整形(-扁平片刃)石斧の一部	3.0	1.0	0.9	2.55	層灰岩
80	2区	SI02	整形石斧(破片)	4.6	1.9	0.5	8.02	層灰岩
81	2区	SI02	整形石斧(未完成)	7.8	3.7	2.6	142.59	層灰岩
95	2区	SP08	敲石	11.9	9.1	4.6	5030	玄武岩
98	2区	1層	石鍬	7.1	5.2	0.8	57.84	玄武岩
99	2区	1層	整形(-扁平片刃)石斧の一部	4.0	2.0	0.9	7.13	層灰岩
109	2区	2-3層	石包丁	2.4	2.4	0.25	2.13	砂岩
133	3b区	4層	扁平片刃石斧の未成品	6.0	3.6	0.7	31.91	層灰岩
163	3a区	5層	整形石斧(未完成)	5.5	2.5	2.6	66.21	層灰岩
164	3a区	5層	整形石斧	8.0	3.0	3.1	127.73	砂岩
165	3a区	5層	整形石斧	3.2	1.3	1.2	8.55	層灰岩
166	3b区	5層	石包丁	1.9	3.1	0.2	2.50	砂岩
167	3b区	5層	石鍬	12.4	6.1	1.6	152.66	玄武岩
168	3a区	5層	磨製石劍	5.1	4.4	0.8	32.47	頁岩

IV 総括

1. 1 区：「① 幅鉾川本流に注ぐ支流の形状（幅や流れる方向など）の把握」

成果1：弥生時代から古代にかけての、幅鉾川支流の埋没状況の把握

これまでの発掘調査によって確認された、安国寺前遺跡から幅鉾川に注ぐ支流は、上流から並べると、平成17年度（長崎県教育委員会2006）、平成7年度（1997）、令和2年度（本報告）、平成19年度（2009）となる。これら4次の調査によって報告された自然流路（幅鉾川の支流）の特徴として、次の4点が見出される。①この自然流路の底は、風化玄武岩からなる岩盤層にまで至る。②風化玄武岩の岩盤層の直上には、大きいものでは人頭大の円礫を多数含む層が見られ、そうした円礫に挟まるようにして、弥生時代の遺物が見られる。③こうした遺物は、弥生時代前期後葉から中期後葉まで時期幅を持ち、多くは中期中葉（須玖I式）である。④令和2年度（本報告）と平成19年度調査の層位はおおむね対応し、この2地点においては弥生時代の堆積の上に古代・中世の堆積が見られる。

これらから、この自然流路の変遷を復元すると次のようになる。自然流路がいつから存在するもののかは明らかにできないが、①より、本来かなりの流速をもつ流路であったものと考えられる。②より、人頭大の大きさの円礫が多量に下流へ運ばれる出来事（土砂崩れや鉄砲水）が上流で起こったものと考えられ、③より、その時期は中期後葉を上限とする（注1）。その後については、弥生時代後期の遺物が確認されないため不明であるが、④より、古代中世にかけて粘土層が順次堆積し、埋没したものと考えられる。粘土層が堆積することから水気の多い場所であったものと考えられ、一部、土層に畝状の凹凸が見られることから、耕作地であった可能性が示唆される。

このような考古学的な所見と自然科学分析（珪藻化石分析）による所見の対比を試みたが、珪藻化石が検出されず、叶わなかった（付論1）。後述するように、3区においても珪藻化石が検出されず、その理由は不明である。

注1：この層の堆積の厚さを上流から順に示すと、0.3～0.4m程度（2006:16層）0.4～0.6m程度（1997:6b, 6c層）0.55m程度（本報告:5-5層）0.8m以上（2009:7層）となる。このように下流に行くほどや厚みを増す。平成7年度（1997）では5d層、令和2年度（本報告）では5-3層の堆積（第8図）に見られるように、この層位が侵食されたのち堆積する層位が見られるため、大礫まじり層の堆積後もある程度の流速は維持されたものと考えられる。

2. 2 区：「② 古代の道路の有無と、実態の解明」

成果2：平成6、7年の調査で確認された古代の道路跡を確認

平成6年度川原細地区（1997）において、道路跡と考えられる遺構が検出された。その特徴は、側溝幅約60cm、深さ5cm、芯々間距離6m、道路面は茶褐色粘質土でやや硬化する。その下の灰茶褐色土からは須恵器3点と瓦1点が出土した。また平成7年度安国寺前A遺跡（1997）において、おおよそその延長線上に、平行する複数の溝状遺構が確認された。これらに加え、原の辻丘陵の東側に木簡等の遺物が検出されたことから、これらを結ぶ官道の存在が指摘されてきた。この有無を確認すべく、平成24年度河原畑地区的調査において、道路状遺構の推定位置に調査区（5区）が設定されたが、その痕跡は確認されず、削平を受けたためとされた（2013）。

今回の調査では、上記の調査成果から推定される位置に、左右に側溝を持つ道路状遺構（SX01, SD01, 02）

が確認された。特徴として以下の3点が挙げられる。①東西の溝幅1.3～1.7m、深さ40cm、芯々間距離は6mである。②道の中央部に溝が見られ、それは安国寺前A遺跡の平成7年度（1997）の調査区においても検出された中央部分の2条の溝につながると考えられる。③検出面には砂利層が帶状に広がる。

①より、左右側溝の芯々間距離は川原畑地区（1997）と一致し、側溝を持つ古代の道路が直線的に伸びていたことが分かる。川原畑地区（1997）で検出された側溝の深さは5cmと極めて浅く、削平が進んでいた可能性が指摘される。②より、東西側溝の間に見られる溝の埋土には、砂利の堆積が見られることから、ある程度の流速があったものと判断される。これについては、A) 道路として利用される中で、側溝の移動（付け替え）によって、道路の中央部に側溝が作られることになったB) 弥生土器のみが出土することため道路とは無関係で、弥生時代の別の遺構である、これら2つの可能性が考えられる。A) である場合は、今回検出された東側溝より東には溝の掘削が見られないため、中央の溝と対になる西側溝は、調査区（2区）の西側（調査区外）にあることになるが、これについては不明である。

しまりの強い砂利層が広がるSX01の上面からは、7cm程度角礫が飛び出していた。路面はもともと平坦であったはずで、この角礫が本来は土中にあったとするならば、路面は中世以降の土地利用（耕作）により削平されたものと判断される。また、③より帶状に見られる砂利層は、歩行によるくぼみを補修した痕跡で、路面の補修に敷設した砂利の下位が帶状に見えているものと考えられる。

時期を推定しうる遺物は、わずかに西側溝（SD02）において、外面にカキメを、内面に同心円の当て具痕を持つ須恵器の小片（第36図88）が一片検出されたのみで、道路の敷設時期と利用期間、廃棄時期を明らかにしうる情報は得られなかった。

成果3：弥生時代中期の堅穴建物群の発見

2区東側の調査によって4棟の堅穴建物が存在した可能性が示された。しかし掘削できた範囲は部分的で、結果的に平面プランを認証したと考えられるものもあるため詳細については現状では不明である。

SI02の床面直上から須玖I古段階の甕（第34図76）が、遺構埋土からは須玖I式新段階の甕が出土している。これを切るSK01から須玖I新段階の小形の甕が出土しているが、遺構の年代としては須玖II式に下る可能性がある。これまで閑縁地区では、弥生時代前半～中期後半の列墓が確認されてきたが（宮本2018）、これらとは時期的に重なる。安国寺前A遺跡（1997）において幡鉢川北側に居住域（遺構群）が確認され閑縁列墓との関係はすでに指摘されていたが、今回の調査によって確認された堅穴建物群は、列墓に近接し、その被葬者を考える上で重要な手がかりとなる。またVI区13号土坑からは粘盤岩（層灰岩）剥片241点がまとまって検出されたため「石器製作の場」（原の辻遺跡 総集編I）と評価してきた。今回こうした遺構は確認されなかつたが、層灰岩と判断される石器（剥片および製品）は、石材の判定が難しいものを含めると実に調査区全体で109点を数える。今回初めて検出された堅穴建物群は、上記のVI区13号土坑の南側約30mにあることから、「石器製作の場」との関連が考えられるが、特に今回調査した堅穴建物（SI02）からは、朝鮮系無文土器の可能性がある、胎土が極めて精良で硬質の小形土器、および層灰岩製の鑿形石器の未成品（第35図79, 81）が共伴した（写真22）。森（2018）は、「（層灰岩製の）片刃石斧生産は朝鮮半島南部の制作技法を知っている人々、具体的には渡来人によるもの」と考えたが、この共伴関係は森の仮説を一部支持

するものである。

3. 3区：「③ 古墳時代前期の遺構の有無」

成果4：古墳時代前期の遺構は確認されず。3区は谷の中央部にあたり、湿地のような環境。

3区の調査によって確認された層位の概要是次のようなである。①粘土層がおおむね水平堆積する。②6層（最下層）と5層には弥生時代中期後半の遺物が、その上（4層）には古墳時代前期の遺物が見られる。③地山（7層；無遺物層）は3区の西側と東側が緩やかに高まる。

過去の調査（安国寺前A遺跡（1997））において、VII区1号溝とよばれる古墳時代の溝が確認されていたが、この遺構の続きや関連遺構は見られなかった。しかし、VII区1号溝の5m東側には「沼状落ち込み」と呼ばれる幅15m、深さ1mを測る浅い窪地状の落ち込みが確認されており、5層（最下層）から弥生時代中期の土器が、4層からは柳田康雄氏の編年による土師器II c式の土器が出土した。これは今回の堆積状況（上記②）と一致する。また③の事実を踏まえると、今回確認された土層は「沼状落ち込み」の延長部分であり、3a区と3b区の中間付近を最深部とする。

おおむね水平堆積するこれらの土層には、垂直方向の細長い斑鉄が見られた。また、6層（最下層）の埋没時期（中期後葉）以前の居住空間が、隣接する2区で確認されたことから、水田としての土地利用が考えられた。このため、珪藻化石分析とプラントオパール分析を行った（付論2）。ともに珪酸を主成分としながら、後者のみが検出された。上記のように、調査の所見からは沼地であると判断され、珪藻が育たない乾燥環境であったということは考えにくい。このため、なぜ珪藻化石が見られないのかについてはわからない。上記のように、1区においても珪藻化石は検出されなかつたが、これとの関連についても不明である。

遺物の報告では、かなり小片の遺物も、また層位的な情報が失われた遺物についても、可能な限り取り上げたが、弥生時代後期に属する可能性をもつ遺物は、2区のSD08から出土した「くの字口縁」を持つ短頸壺（第18図66）一点、および格子タタキの三輪系土器小片ばかりであることが注目される。

また、これまであまり注目されてこなかったが、1区の自然流路において、今回の調査を除く3次の調査で合計6点もの甕棺の口縁部片（弥生時代中期前葉～中葉）が出土しており、上流（原の辻遺跡に隣接する安国寺前遺跡）に、この時期の墓地が存在する可能性を示唆する。また3区においても、6層（最下層）あるいは5層から、中期初頭の甕棺の口縁部（第45図161）が出土しており、閑縁墓地（列墓）が現在確認されているよりさらに北側に伸びる可能性を示唆する。

以上から、今回の調査地周辺の地形や環境を大まかにまとめると、

A：1区は少なくとも弥生時代中期後葉まではある程度流速のある幡鉾川の支流で、後には粘土層が堆積する湿润な場所で耕作地としての利用が考えられる。

B：3区は閑縁地区の最北端の谷頭を水源とする、小さな谷底に位置し沼地状の土地であった。

C：2区はこうした湿地状の土地に挟まれた緩やかに小高い丘陵状の土地であり、弥生時代中期後葉までは居住空間であり、古代には道路として利用された。

以上のようにまとめることができる。

付論 1. 1 区の自然科学分析

堆積物中の珪藻化石群集

野口真利江・森 将志（株式会社パレオ・ラボ）

1.はじめに

珪藻は、 $10 \sim 500 \mu\text{m}$ ほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。ここでは、長崎県の原の辻遺跡において採取された土層堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

2. 試料

分析試料は、谷筋に位置する 1a 区の自然流路で採取された土層堆積物 3 点である（表 1）。

表 1 堆積物の特徴

分析No.	試料名	時期	堆積物の特徴
1	3-2	奈良時代?	黒褐色粘土 (10YR3/1) しまり強い、粘性非常に強い、斑駁を含む。 かなり均質で、粒子の細い粘土である。
2	4		黒褐色砂利混じり土 (2.5Y3/1) しまり強い、粘性強い。黒褐色粒土をベースに、 $\phi 5\text{mm}$ 程度の砂利も多く含む。斑駁の斑駁が非常に多く見られ、全体的に赤褐色がかっている。 この層より遺物の量がやや増える。
3	5-5	弥生時代	褐灰色砂礫混在土 5~20cm 円礫が多段混在。最下面には人頭大の円礫が多量に見られた。 礫にはさまで遺物を多く検出した。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレバラートを作製した。

(1) 濡潤重量約 1.0g を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 10 回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレバラートを作製した。

作製したプレバラートは顕微鏡下 400 ~ 1000 倍で観察し、プレバラートの面積の 2/3 以上について検鏡した。

3. 硅藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づく。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種（?）として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種（?）として、汽水種は汽水不定・不明種（?）として、淡水種は広布種（W）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱う。また、

破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱う。以下に、小杉(1988)が設定した海水～汽水域における環境指標種群のうち汽水域における環境指標種群と、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔汽水藻場指標種群(C2)〕：塩分濃度が4～12 ‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

〔汽水砂質干潟指標種群(D2)〕：塩分濃度が5～26 ‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

〔汽水泥質干潟指標種群(E2)〕：塩分濃度が2～12 ‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

〔上流性河川指標種群(J)〕：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、穀面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

〔中～下流性河川指標種群(K)〕：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

〔最下流性河川指標種群(L)〕：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

〔湖沼浮遊生指標種群(M)〕：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

〔湖沼沼沢湿地指標種群(N)〕：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼沢湿地付着生指標種群(O)〕：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群(P)〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを中心とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群(Q)〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

〔陸生珪藻A群(Qa)〕：耐乾性の強い特定のグループである。

〔陸生珪藻B群(Qb)〕：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4. 結果

いずれの堆積物からも殻が半分以上残存する珪藻化石は検出されなかった。なお、珪藻化石が検出されなかつたため、珪藻分布図は作成していない。

5. 考察

堆積物は、砂礫まじりあるいは砂利が混ざる土（5層、4層）と、粘性の強い斑鉄を含む粘土層（3層）であった。検鏡の結果、これらの堆積物には珪藻化石が含まれていなかつた。堆積物から珪藻化石が産出しない要因については、試料採取時や分析過程において珪藻化石が消失した訳ではなく、以

下の可能性が考えられる。

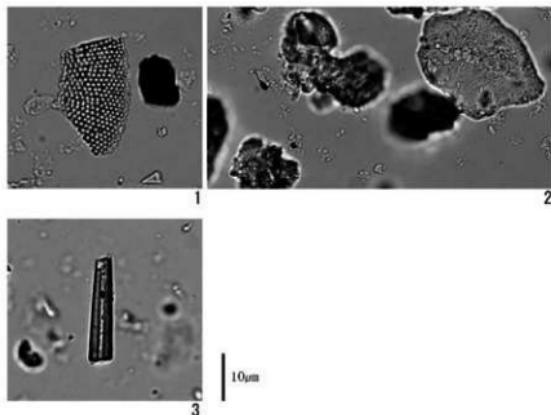
砂礫混じりの土（5層：弥生時代）は、自然流路に水が流れている時の堆積物と推察される。5～20 cm の円礫や遺物を多量に含む様相から、河床の堆積速度は速かった可能性がある。また、大きな粒子が運搬・堆積するような水域環境であったと推察される点から、微小な珪藻化石は捕獲されなかつたため、珪藻化石が検出されなかった可能性がある。

その上位の砂利混じり土（4層：奈良時代？）は、水平堆積しており、砂利を含むものの粘土質堆積物が多く含まれるようになるため、この時期の流路は流量が減少した可能性がある。珪藻も繁茂し、堆積するようになったと推測されるが、珪藻化石は得られなかった。何らかの要因で pH 環境が変動し、珪酸質生物遺骸の選択的消失（Murakami, 1996）が生じたため、生物性のガラス質の中では比較的弱いとされる珪藻化石のみが堆積後に消失してしまった可能性が考えられる。

さらに上位に累積する斑鉄を含む粘土層（3層：奈良時代？）においても、わずかな破片（図版 1）が検出されたものの、珪藻化石は得られなかった。3 層においても珪酸質生物遺骸の選択的消失が生じていた可能性がある。なお、得られた珪藻化石は破片であるため、同定が非常に困難であるが、かろうじて推測すると海生珪藻の可能性がある。よって、粘土層には海成層の二次堆積物が含まれている可能性が示唆される。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, 73-88.
- 千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新。Diatom, 30, 7-30.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.
- Murakami T. (1996) Siliceous Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Naganoyama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan. 第四紀研究, 35, 17-23.



図版 1 堆積物中の珪藻化石等の顕微鏡写真（括弧内の数字は分析 No. を示す）

1. 硅藻體破片 (No. 1) 2. 硅枝子 (No. 2) 3. 硅化毛 (No. 3)

付論 2.3 区の自然科学分析

原の辻遺跡発掘調査検出試料自然科学分析報告

株式会社古環境研究所

1.はじめに

令和2年度に実施された原の辻遺跡閨縫地区の発掘調査では、水成堆積とみられる粘質土層が確認された。そこで、当時の堆積環境と植生、稻作の可能性を検討する目的で、珪藻分析とプラント・オバール分析を実施することになった。

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オバール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

2. 試料

試料は、閨縫地区の3a区の4層（黒褐色粘質土）、5層（黄灰色粘質土）、6層（灰オリーブ砂混じり粘質土）より採取された土壤3点である。これら3試料について珪藻分析とプラント・オバール分析を行う。

3. 硅藻分析

（1）方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE Ci）によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(2) 結果

1) 分類群

産出した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）2分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数え、分析結果を表1に示す。現生珪藻のCMB仮説と呼ばれる分類体系も用いられるが、科や属によってすべてを再分類できているわけではなく、混乱を避けるため従来の分類を用いた。以下に出現した分類群を記載し、顕微鏡写真に示す。

〔貧塩性種〕

Hantzschia amphioxys, *Navicula mutica*

2) 珪藻群集の特徴

いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、珪藻は検出されないか検出されても陸生珪藻がわずかであった。下位の6層では珪藻は検出されず、5層では、*Navicula mutica*、4層では、*Hantzschia amphioxys*がわずかに認められる。

(3) 珪藻分析から推定される堆積環境

分析の結果、3a区の4層、5層、6層では珪藻密度が極めて低く、わずかに陸生珪藻が産出するのみであった。珪藻化石が産出しないことに関しては、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境もしくはやや乾燥した不安定な環境や、強アルカリ性土壤により珪藻が溶融もしくは分解されたことなどが挙げられる。ただし、プラント・オパール分析の結果（次章参照）では、ある程度の量でプラント・オパールが産出すること、5層や6層はヨシ属の産状からやや湿った環境が想定されていることなどから、これらの可能性を積極的に肯定することはできない。以上のように、珪藻化石が産出しないことの原因は不明であり、その解明は今後の課題としたい。

なお、イネのプラント・オパールの産状から、調査地の近傍で水田稲作が行われていた可能性が考えられている。水田のような湛水と落水を繰り返す水環境の変化が著しいところでは、総じて珪藻は生育しにくい。ただし、水分欠乏に耐性のある*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*などはそうした環境下でも生育が可能である。また、わずかに産出した破片については、他所から運ばれた異地性の珪藻が反映されたと考えられ、周囲に珪藻が生育する環境が分布していた可能性が示唆される。

4. プラント・オパール分析

(1) 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）

表1 原の辻遺跡（闇緑地区）の珪藻分析結果

分類群	3a区		
	4層	5層	6層
貧塩性種（淡水生種）			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	3		
<i>Navicula mutica</i>		1	
合計	3	1	0
未同定	0	0	0
破片	18	21	0
試料 1 cm ³ 中の殻數密度	0.6	0.2	—
	×10 ³	×10 ³	—
完形殻保存率（%）	—	—	—

- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスピーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡 (Nikon OPTIPHOT2-POL) 下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象とした。計数は、ガラスピーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料 1g 中のプラント・オパール個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる (杉山, 2000)。

表 2 原の辻遺跡 (闇緑地区) のプラント・オパール分析結果
検出密度 (単位: ×100 個/g)

(2) 結果

1) 分類群

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を写真図版に示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族型

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキ

分類群 (和名・学名)	3a区		
	4層	5層	6層
イネ科 Gramineae (Grasses)			
イネ <i>Oryza sativa</i>	22	23	28
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	5	23	11
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>	27	29	22
ウシクサ族型 <i>Andropogoneae type</i>	11	6	6
タケ亜科 Bambusoidea (Bamboo)			
メダケ節型 <i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus type</i>	22	40	28
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>	5	6	6
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Sasa etc. type</i>	5	6	6
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi type</i>	5	6	6
その他 Others	16	17	17
その他のイネ科 Others			
未分類等 Unknown	92	92	94
樹木起源 ArboREAL			
その他 Others	11	12	6
プラント・オパール総数 Total	221	260	230

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)			
イネ <i>Oryza sativa</i>	0.64	0.68	0.82
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	0.34	1.45	0.70
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>	0.34	0.36	0.28
メダケ節型 <i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.25	0.47	0.32
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.03	0.03	0.03
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.04	0.04	0.04
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi type</i>	0.02	0.02	0.02

ササ節・チマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、その他 (未分類等)

〔イネ科-その他〕

未分類等

〔樹木〕

その他

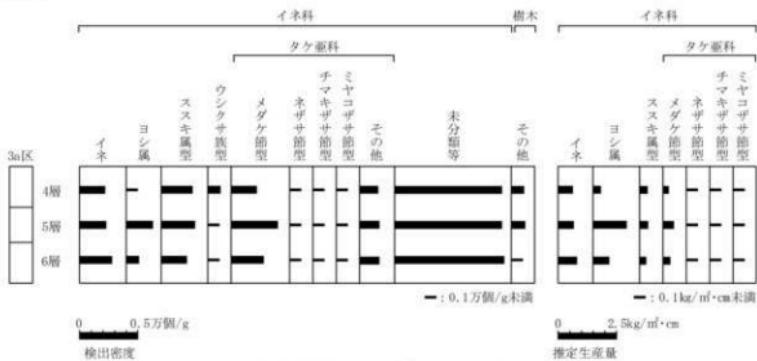


図1 原の辻遺跡（隣接地区）のプラント・オパール分析結果

2) プラント・オパールの検出状況

各層ともイネ、ススキ属型およびメダケ節型が比較的高い密度である。5層ではヨシ属も比較的高い密度である。ほかにウシクサ族型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木起源が検出されているが、いずれもやや低い密度である。

(3) 考察

1) 稲作の可能性について通常、プラント・オパール分析で稲作跡の探査や検証を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出されると、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。なお、近年の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは3,000個/gを基準値とする。

当該調査区では、4層、5層、6層でイネのプラント・オパールが検出されている。密度はそれぞれ2,200個/g、2,300個/g、2,800個/gと比較的高い値であるが、稲作跡の判断基準値には達していない。このことから、これらの層では、調査地の近傍において稲作（水田）が営まれていた可能性が考えられる。仮にこれらの層で稲作が行われていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことの要因としては、1) 稲作が行われた期間が短かった、2) 稲の生産性が低かった、3) 試料採取箇所が畦畔など耕作面でなかった、4) 土層の堆積速度が速かった、などが考えられる。

2) プラント・オパール分析から推定される周辺植生と環境

ヨシ属やマコモ属は湿地や湿った土壤環境に生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いた土壤環境に生育する。このことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿润）を推定することができる。

おもな分類群の推定生産量をみると、下位の6層と5層ではヨシ属がやや優勢であり、これにススキ属型とメダケ節型が随伴する。一方、4層ではヨシ属は少量で、ススキ属やメダケ節型がやや優勢

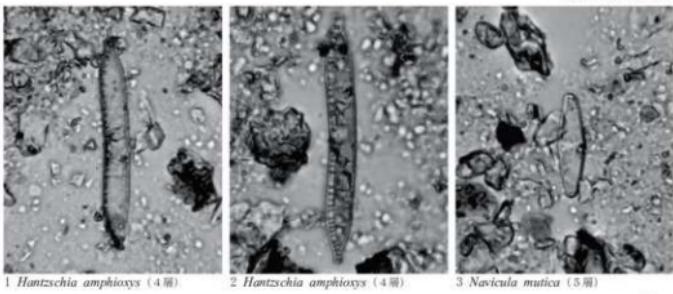
である。こうしたことから、6層と5層の堆積時の調査地はやや湿った環境であり、4層の時期は比較的乾いた環境であったと推定される。

参考文献

- Hustedt, F. (1937 - 1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Supp. 1, 15, p. 131 - 506.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae, vol. 2, no. 1-no. 4
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義ーわが国への導入とその展望ー. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指數 DALpo, pH 耐性能. 内田老鶴園, 666p.
- Theriot, E. C., J. J. Cannone, R. R. Gutell & A. J. Alverson (2009) The limits of nuclear-encoded SSU rRNA for resolving the diatom phylogeny. Eur. J. Phycol. 44, p. 277-290.
- 鈴木秀和・南雲保 (2013) 珪藻類の分類体系 (総説) ~現生珪藻の属ランクのチェックリスト. 日本プランクトン学会報 60 (2). p. 60-79.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定ー古環境推定の基礎資料としてー. 考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オバール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用ー古代農耕追及のための基礎資料としてー. 考古学と自然科学, 20, p. 81-92.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オバール分析法の基礎的研究 (1) ー数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法ー. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オバール分析法の基礎的研究 (5) ープラント・オバール分析による水田址の探査ー. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

図版1 原の辻遺跡(閑縁地区)の珪藻

※()内は、検出箇所



図版1 原の辻遺跡(閑縁地区)のプランクトン・オバール

※()内は、検出箇所

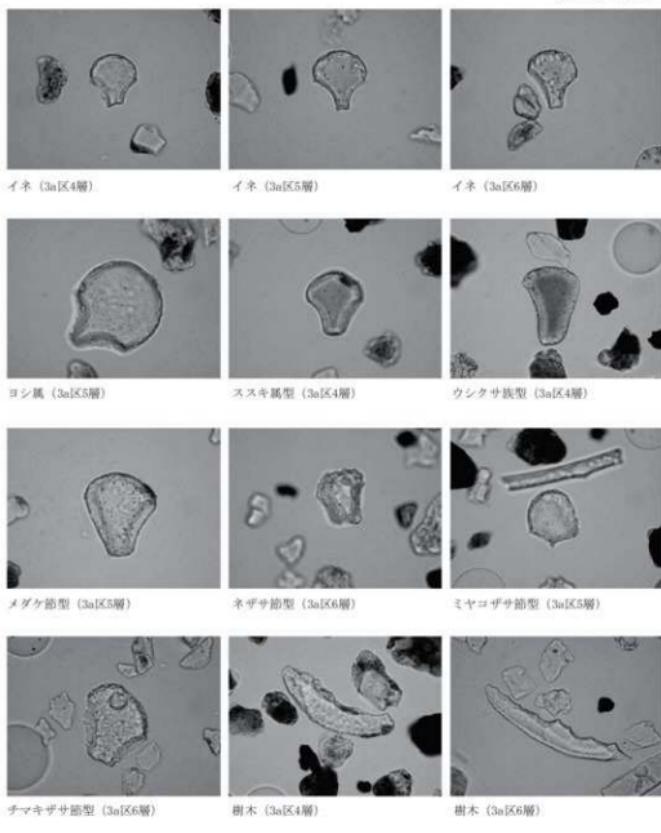




写真1 1a区自然流路完掘状況（東から）



写真2 1a区自然流路土層堆積状況（南から）

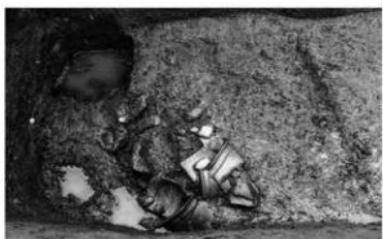


写真3 1a区自然流路5-1層遺物出土状況（南から）



写真4 1区調査終了状況（東から）



写真5 1b区古代・中世遺構検出状況（北西から）



写真6 1b区SD08、07、06調査終了状況（南から）



写真7 2区西侧北壁土層堆積状況（南西から）



写真8 古代道路調査終了状況（東から）



写真9 2区東側弥生時代竪穴建物群（東から）



写真10 SI01 完掘状況（南から）

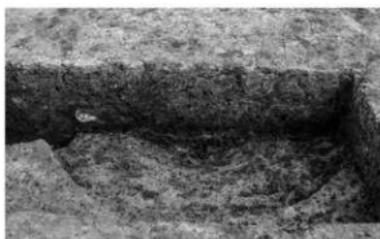


写真11 SI02 炉跡半裁状況（東から）



写真12 SI02 床面直上土器出土状況（西から）



写真13 SI03 掘削終了状況（西から）



写真14 SK01 半裁状況（南東から）



写真15 サブトレンチ4土層堆積状況（北東から）



写真16 3b区土層堆積状況（南西から）



写真17 自然流路5-1層出土土器（第12図14）



写真18 自然流路5-1層出土土器（第12図15）



写真19 SI02床面上出土土器



写真20 SK01出土土器

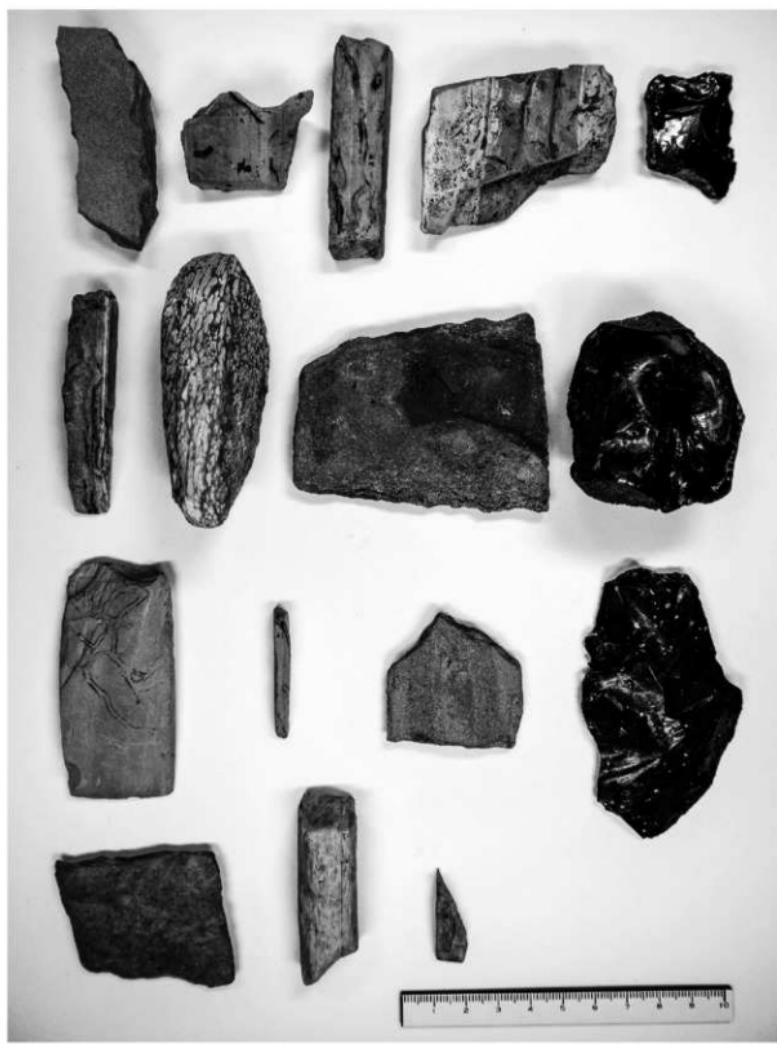


写真 21 1区出土石器



写真 22 S102 出土遺物



写真 23 3区出土石器

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	令和2年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第44集						
編著者名	白石渢渢 中野真澄 林田卓也						
編集機関	長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920(45)4080						
発行年月日	西暦2022年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触	42210	72-92	33° 45' 30" 129° 45' 55"	20201104 ～ 20201225	300m ²	令和2年 度原の辻 遺跡調査 研究事業 (国庫補 助事業)
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡 (閑緑地区)	遺物 包蔵 地	弥生時代・ 古代・中世	自然流路・堅穴 建物・土坑・ピッ ト群・沼状堆積・ 溝状遺構(弥生 ～古墳時代)・古 代道路状遺構・ 溝状遺構	弥生土器・三韓系土器・楽浪 系土器・石劍・石鎌・石鑿形 石斧・古式土師器など(弥生 ～古墳時代) 須恵器・青磁など(古代～中 世)			

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第44集

原の辻遺跡

2022（令和4）年3月18日

発行 長崎県教育委員会

長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂